参考資料１－１

尻別川水系の流域及び河川の概要
（案）

平成１９年１２月１４日

国土交通省河川局

目　　次

１.流域の自然状況 1
　１－１．河川・流域の概要 1
　１－２．地形 4
　１－３．地質 5
　１－４．気候・気象 6
２.流域及び河川の自然環境 8
　２－１．流域の自然環境 8
　２－２．河川及びその周辺の自然環境 15
　２－３．特徴的な河川景観や文化財等 18
　２－４．河川環境を取り巻く背景 21
　２－５．市民活動 22
　２－６．自然公園等の指定状況 23
３.流域の社会状況 25
　３－１．人口 25
　３－２．土地利用 26
　３－３．産業・経済 27
　３－４．交通 28
　３－５．関係のある法令の指定状況 29
４.水害と治水事業の沿革 31
　４－１．既往洪水の概要 31
　４－２．主な洪水の概要 32
　４－３．治水事業の沿革 38
５.水利用の現状 41
　５－１．水利用の現況 41
６.河川流況及び水質 43
　６－１．河川流況 43
　６－２．河川水質 44
７.河川区間の現状 47
　７－１．河川敷等の利用の現状 47
　７－２．河川の利用状況 49

８.河道の特性 50
８－１．尻別川の河道特性 51
９.河川管理の現状 52
９－１．河川管理施設 52
９－２．水防体制 53
９－３．砂利採取 54
９－４．危機管理への取り組み 54
９－５．地域との連携 55

１.流域の自然状況

１－１．河川・流域の概要

尻別川は、その源を支笏湖流域との分水界をなすフレ岳(標高 1,046m)西方に発し、オロウエンシリベツ川、喜茂別川等の支川を合流後、羊蹄山(標高 1,893m)の東側から北西に流れを転じ倶知安町を経由し山麓を迂回しながら真狩川、昆布川等の支川を合流して狭窄部を流下し、これより河積を増しながら田園地帯を流れ、逆川、目名川等の支川を併せ蘭越町磯谷で日本海に注ぐ、幹線流路延長 126km、流域面積 1,640km^2 の一級河川である。

流域は、東西に細長い羽状形を呈し、北海道後志管内の 1 市 6 町 2 村からなる。流域の土地利用は、水田、畑などの農地が約 13%、宅地などの市街地が約 1%、その他山林等が約 86%となっている。

明治初頭に開拓が始まって以来、現在までに治水整備や農地開発が進み、尻別川下流の低平地には後志管内最大の水田地帯が形成されるなど、北海道有数の農業地帯として発展してきた。主な農産物としては水稲、馬鈴薯、アスパラガス等が挙げられる。

陸上交通としては、JR 函館本線、国道 5 号、229 号、230 号、276 号、393 号等の基幹交通網が広がるなど、札幌・小樽や胆振地域を結ぶ物流輸送や観光旅客輸送等に大きな役割を果たし、交通の要衝となっている。

また、羊蹄山・ニセコ連峰を背景に豊かな自然とすぐれた自然景観に恵まれていることや、支笏洞爺国立公園とニセコ積丹小樽国定公園の一部を有していること等から、北海道でも有数のリゾート地帯となっており、近年では日本国内はもとより外国からのスキー客も急増している。

さらに、アユ、サケ、サクラマス、イトウ等が生息し、京極町の「ふきだし公園」では、豊かな湧水が昭和 60 年に環境庁から「名水百選」に選ばれるなど、豊かな自然環境に恵まれている。このように、本水系の治水・利水・環境についての意義は極めて大きい。

流域の地質は、山岳部では第四紀火山砕屑岩類で占められており、丘陵部、平地部では第四紀更新世の真狩別層が広く分布している。さらに河川の沿岸には沖積層が発達して、現河床堆積物、河成段丘堆積物等が分布している。

流域の気候は、日本海側気候区に属し、平均年間降水量については、約 1,500mm である。また、降雪量は全道平均の 2 倍以上の約 1,150cm に及ぶなど、北海道内でも有数の豪雪地帯である。

河床勾配は、源流部から喜茂別町付近までの上流部では約 1/60 以上の急勾配であり、喜茂別町付近から蘭越町付近までの中流部では約 1/130～1/250 程度となっている。一方、蘭越町付近から河口までの下流部では約 1/500～1/5,000 程度となっている。

源流部から喜茂別町付近の上流部は、山岳渓流の様相を呈している。植生は、ササーダケカンバ群落やエゾイタヤーシナノキ群落が見られ、四季折々で様々な表情を見せる。河岸にはヤナギ類を主とした河畔林が発達している。河道は清冽な瀬となって流れ、フクドジョウ、ニジマス、ヤマメ、ハナカジカ等の魚類が生息している。また、国の天然記念物に指定されているオオワシが確認されている。

喜茂別町付近から蘭越町付近の中流部は、畑作地帯が広がり、河岸にはヤナギ類を主とした河畔林が発達している。河道は蛇行し、瀬と淵が形成された多様な環境となっており、カワヤツメ、アユ、ニジマス、ヤマメ、ハナカジカ等の魚類が生息している。また、国内最大級の淡水魚であるイトウが確認されている。河畔にはバイカモ、ミクリ等の貴重な植物が生育しているほか、オオタカ、ヤマセミ等の鳥類が生息している。

蘭越町付近から河口までは、河床勾配が約 1/500～1/5,000 程度で管内最大の水田地帯となっている。高水敷及び中州には、ヤナギ類の河畔林が発達し、河畔にはヤマタニタデ、カタクリ、ミクリ等の貴重な植物が生育しているほか、エゾサンショウウオ等が生息している。また、カワヤツメ、アユ、サケ、イトウ、ヤマメ等の魚類のほか、カワシンジュガイ等が生息している。

尻別川水系の治水事業は、明治 42 年の融雪洪水を契機に改修工事に着手したことにはじまり、その後、昭和 32 年には尻別川河川改修全体計画を策定し、名駒地点の計画高水流量を 1,100 m^3/s として、下流部の捷水路工事等が進められた。昭和 36、37 年と洪水に見舞われ、この洪水により計画規模の見直しをせまられ、昭和 43 年に名駒地点における計画高水流量を 1,700 m^3/s とする工事実施基本計画を策定した。以後、この計画流量に基づき築堤、捷水路、護岸工事等の改修工事を実施してきたが、昭和 50 年代に入り、計画規模に匹敵する洪水が発生して大被害を被ったことや本流域の社会的、経済的発展に鑑み、昭和 59 年に名駒地点における基本高水のピーク流量を 3,300m^3/s とし、ダムにより 300 m^3/s 調節し、計画高水流量を 3,000 m^3/s とする工事実施基本計画の改定を行った。以降、築堤、河道掘削・浚渫等の整備を実施している。

砂防事業については、支川において北海道が昭和 33 年から砂防ダム等を整備している。

河川水の利用については、北海道でも有数の豪雪地帯で年間降水量も多く、羊蹄山やニセコ山系など流域を囲む山岳部から湧き出る豊かな地下水に涵養されて、年間を通して安定した水に潤されている地域であることから、古くから農業用水、鉱工業用水、発電用水などに利用され、農業用水として約 6,050ha におよぶ農地かんがいに利用されているほか、水力発電については、6 箇所で総最大出力約 40,900kw の電力供給が行われている。

水質については、河口から京極町のペーペナイ川の合流点までは B 類型、ペーペナイ川合流点から喜茂別町の喜茂別川合流点までが A 類型、それより上流では AA 類型に指定され、近年は、全川に亘り環境基準値を満たしており、平成 11～14 年、16～18 年に水質ランキング日本一になるなど、良好な水質を維持している。

河川の利用状況については、渓流釣り、アユ釣りのメッカとして地元はもとより遠く管外からの釣り人が多く訪れ、また、カヌーによる川下りや激流区間でのラフティングなどの水面利用が盛んに行われている。

また、高水敷や堤防における散策やスポーツ、住民参加による河川清掃をはじめとするイベント等にも利用されるなど、地域の貴重な憩いの場として利用されている。さらに、地域住民が川や自然とふれあえる水辺拠点として、川を軸とした地域交流、体験学習等にも活用されている。

流域７町村では、尻別川流域の環境保全のため理念や自治体、住民、事業者の責務を示した「尻別川統一条例」を作成するなど、尻別川流域の河川環境・水利用への意識が高まっている。

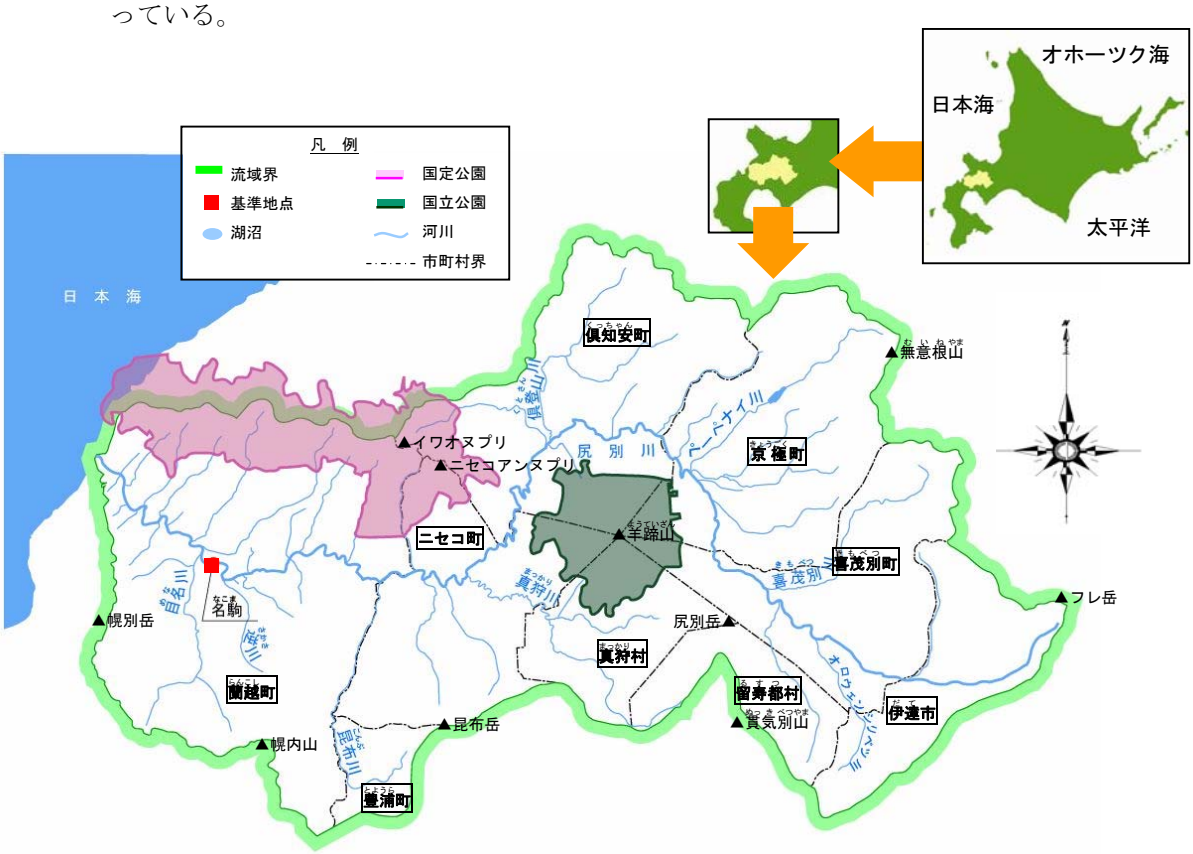


図　１－１　尻別川流域図

表　１－１　尻別川流域の概要

項　目	諸　元	備　　考
流路延長	126km	全国 33 位
流域面積	1,640km^2	全国 42 位
流域市町村	１市６町２村	伊達市、蘭越町、ニセコ町、倶知安町、京極町、喜茂別町、豊浦町、真狩村、留寿都村
流域内人口	約 3.9 万人	
支川数	39	

１－２．地形

尻別川が流れる地域は、北海道西部地域に位置し、東側は石狩低地帯、西側は黒松内低地帯で挟まれた丘陵地形状の山岳地帯である(図 1-2 参照)。

尻別川は、支笏湖と分水界をなすフレ岳(標高 1,046m)付近にその源を発する。その流れは基本的には西方へ流下するが、喜茂別町付近で羊蹄山(標高 1,893m)を北側から迂回し、ニセコ町付近から再び西方へ流下する。途中、真狩川、昆布川等の支川と合流しながら蘭越町港町で日本海に注ぐ、長さ 126km、流域面積 1640km^2 の一級河川である。

周辺の山々は、活火山である羊蹄山を最高峰に、標高 1,000～1,500m の高さを有する山地を形成する。これらの山地は、尻別川を挟んで北東方、北西方、南方の 3 つに大きく分類できる。まず、北東方ではニセコアンヌプリ(標高 1,308m)を筆頭に、標高 1,200m 前後のニセコ火山群が東西方向に火山列を形成している。一方、北西方の山々は、無意根山(標高 1,464m)を筆頭に、喜茂別岳(標高 1,177m)や本倶登山(標高 1,009m)が比較的なだらかな山稜を形成しながら連なっている。これら山地は北方へは積丹半島、南方へは室蘭近くまで連なる標高 1000m 前後の山地を形成している。南方の山々は、羊蹄山も含め、尻別岳(標高 1,107m)、昆布岳(標高 1,045m)など独立峰を形成するものが多い。

また、周辺の平野部は、上流域から中流域では非常にゆるい凹凸をもった台地状の地形や段丘地形を有している。一方下流域では地形が開け、幅の広い谷底平野や段丘地形が広がる。なお、倶知安町からニセコ町にかけては尻別川の浸食によって形成された河谷地形が認められ、河川の蛇行が著しい。

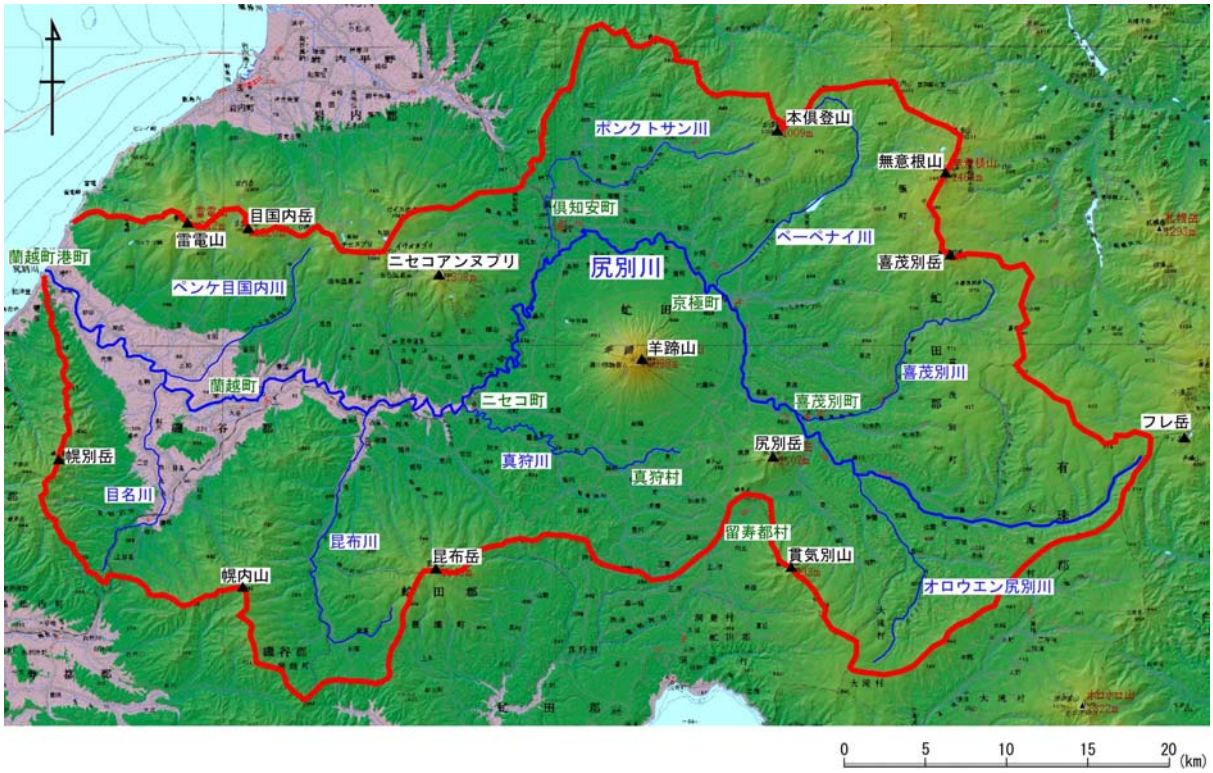


図 １－２　調査地周辺の地形図　(国土地理院「数値地図」より作成)

１－３．地質

尻別川流域の地質は、基本的には新第三紀の火成岩を基盤岩とし、その上位に第四紀の火山岩や火砕流（火山灰）、未固結堆積層が分布する。

新第三紀の地質分布は、主に東方の山地、および南西部の山地に見られる。そのほとんどが苦鉄質火山岩類で、東方の山地においては珪長質火山岩類や堆積岩類の分布も見受けられる。また尻別岳、昆布岳等の独立峰も苦鉄質火山岩で構成されている。これら新第三紀の火山岩類は、東北日本弧で特徴的に見られるもので、激しい海底火山活動によって形成された火山岩や火砕岩から構成されている。一般にこのような地質が分布する地域をグリーンタフ地域と呼ぶ。

第四紀の地質分布は、尻別川流域のほぼ全域で見られ、苦鉄質火山岩類や火砕流（火山灰）、河床や段丘を構成する未固結の堆積層等が分布する。苦鉄質火山岩類は、尻別川流域のほぼ中央付近から西方にかけて分布する、羊蹄山やニセコアンヌプリ、目国内岳（めこくないだけ）、雷電山（らいでんやま）等の火山体周辺に見られる。また南東側の貫気別山（ぬっきべつやま）周辺でも見られる。火砕流（火山灰）堆積物は、尻別川と昆布川の合流点付近より上流側の尻別川沿いに広く見られる。この火砕流のほとんどは洞爺カルデラ起源のもので、尻別川最上流部では支笏カルデラ起源の分布も確認されている。

未固結堆積層の分布は、基本的には現河川に沿った分布を示す。地質構成は河川による堆積物で、礫、砂、粘性土、火山灰等で構成されている。その他未固結層には岩屑の分布もあり、それは火山岩分布斜面の低標高部に限って分布が認められる。

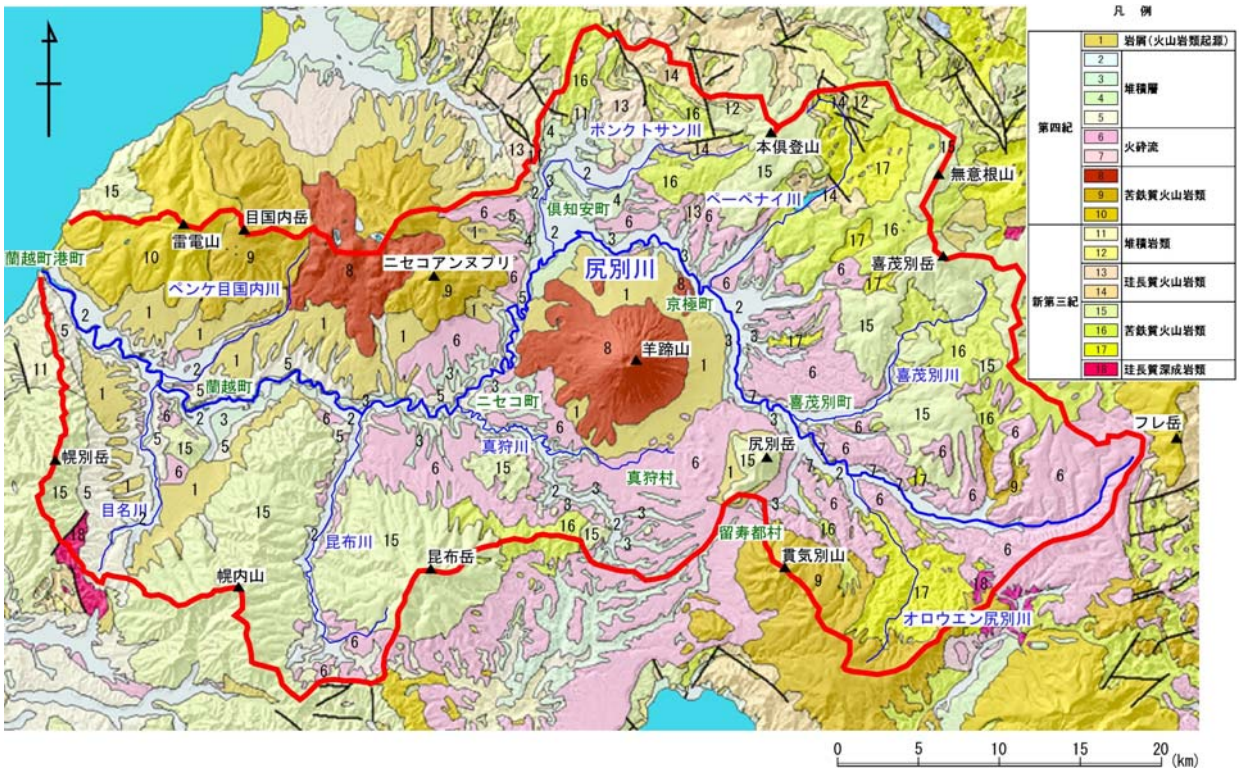


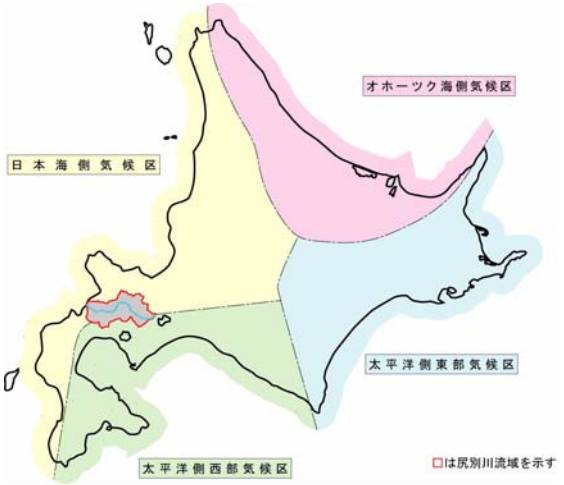
図　１－３　調査地周辺の地質図　（産総研発行「北海道地質図」より作成）

１－４．気候・気象

流域の気候は、ほぼ日本海側気候区に分類され、一般に春から夏にかけては、温暖で晴天が多いが、冬は典型的な北西の季節風の影響を受け、降雪量が多い。特にニセコ山系、羊蹄山麓地帯は、北海道屈指の豪雪地帯となっている。

流域の気温は、年平均気温で喜茂別町が 5．8℃、倶知安 7．1℃、蘭越 7．8℃で上流域と下流域では 2℃の温度差がある。最高気温の平均は上下流域とも差はなく 33℃程度となっている。また、最低気温の平均では内陸的気候を呈する喜茂別と比較して、日本海に近い蘭越は 7．1℃高い。

平均年間降水量については、約 1,500mm である。また、降雪量は全道平均の 2 倍以上の約 1,150cm に及ぶなど、北海道内でも有数の豪雪地帯である。



※出典：「北海道の気候」を基に作成

図 １－４　気候区分図

表 １－２　主な気象観測値

項　　目	蘭　越	倶知安	真　狩	喜茂別	全道平均
平均気温（℃）	7.8	7.1	5.6	5.8	7.7
最高気温（℃）	34.0	33.9	32.3	33.0	33.7
最低気温（℃）	-23.4	-24.0	-20.7	-30.5	-22.4
平均風速（m/s）	1.9	3.0	1.9	1.5	3.8
最大風速（m/s）	13.0	19.0	17.0	10.0	23.7
日照時間（時間）	1229.5	1419.9	1176.5	1302.5	1128.1
降水量（mm）	1222.1	1519.6	1414.0	1248.6	1679.1

※出典:気象庁ウェブサイト「電子閲覧室」による
統計期間(1997 年～2006 年)平年値
※「北海道」の値は、各支庁所在地のデータの平均値
※最高気温、最低気温、最大風速は極値

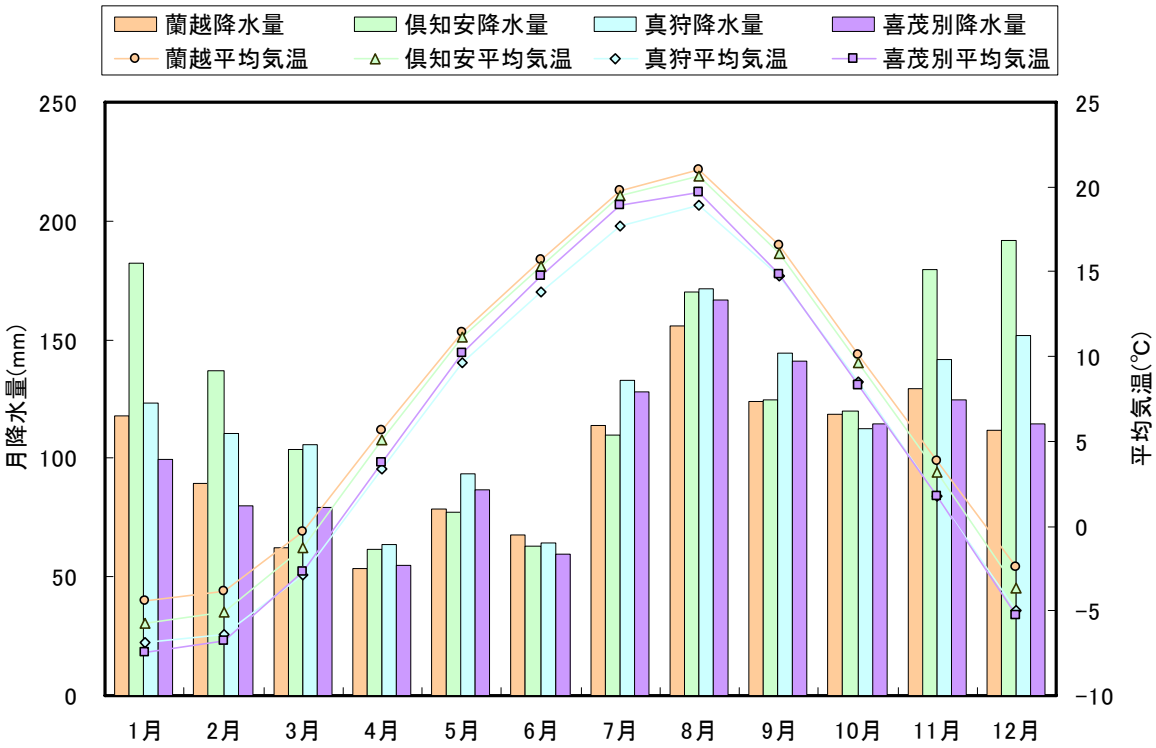


図　１－５　月別降水量・気温

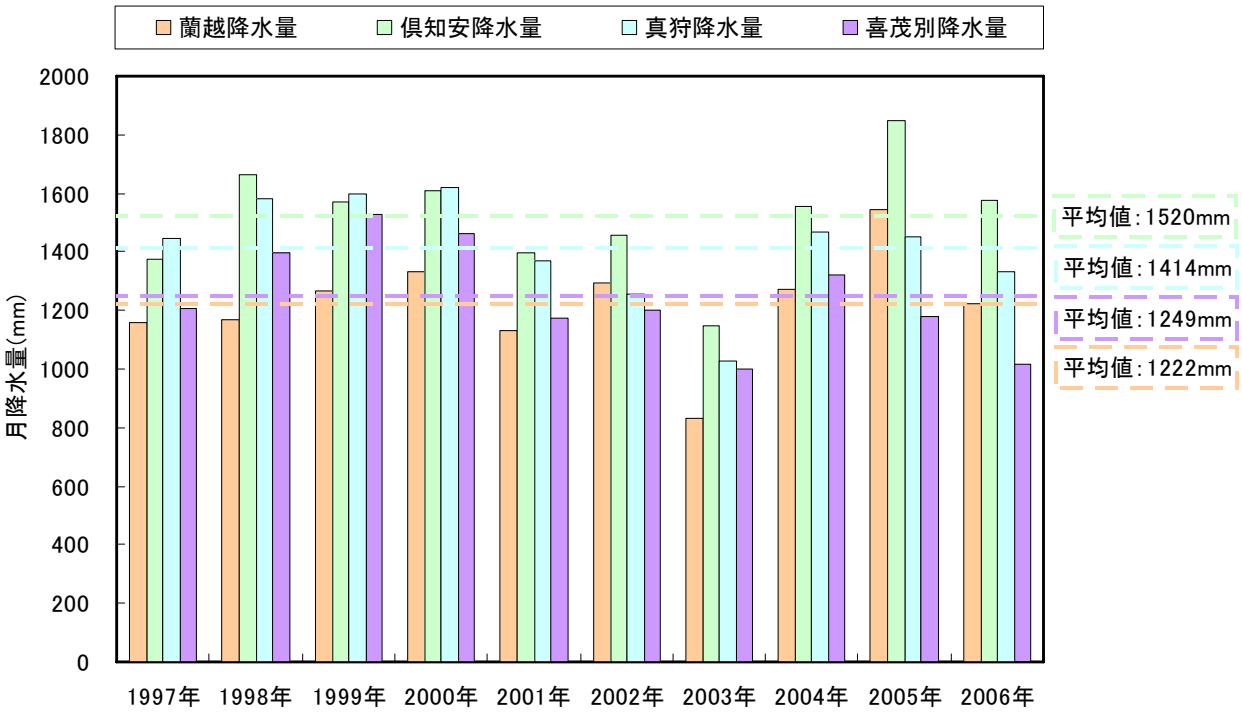


図　１－６　年降水量

※出典:気象庁ウェブサイト「電子閲覧室」による
統計期間(1997 年～2006 年)平年値

２. 流域及び河川の自然環境

２－１． 流域の自然環境

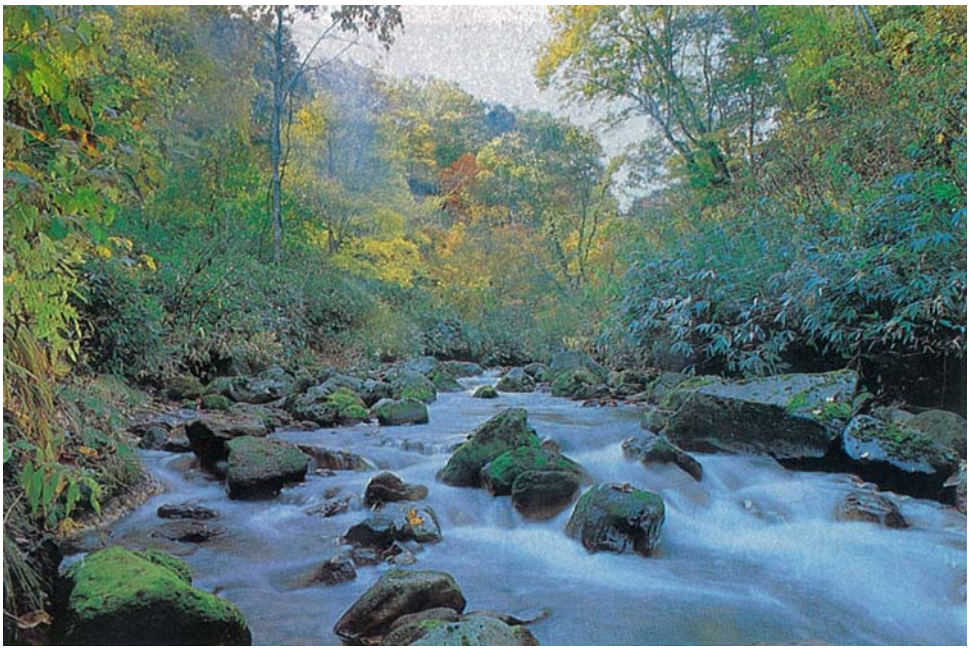
尻別川流域の中央に支笏洞爺国立公園、北西にニセコ積丹小樽海岸国定公園の自然公園があり、豊かな自然とすぐれた自然景観に恵まれている。また、支笏洞爺国立公園内には、日本百名山の１つになっている羊蹄山がそびえており、富士山（ふじさん）に似た姿から蝦夷富士（えぞふじ）とも称され、季節ごとに変わる美しさに訪れる人々の心をとらえている。北西部には、世界でも屈指の良質なパウダースノーに恵まれたニセコ山系スキーエリアがあり、日本国内はもとより外国からのスキー客が急増している。

羊蹄山と蘭越町市街地

（植生）

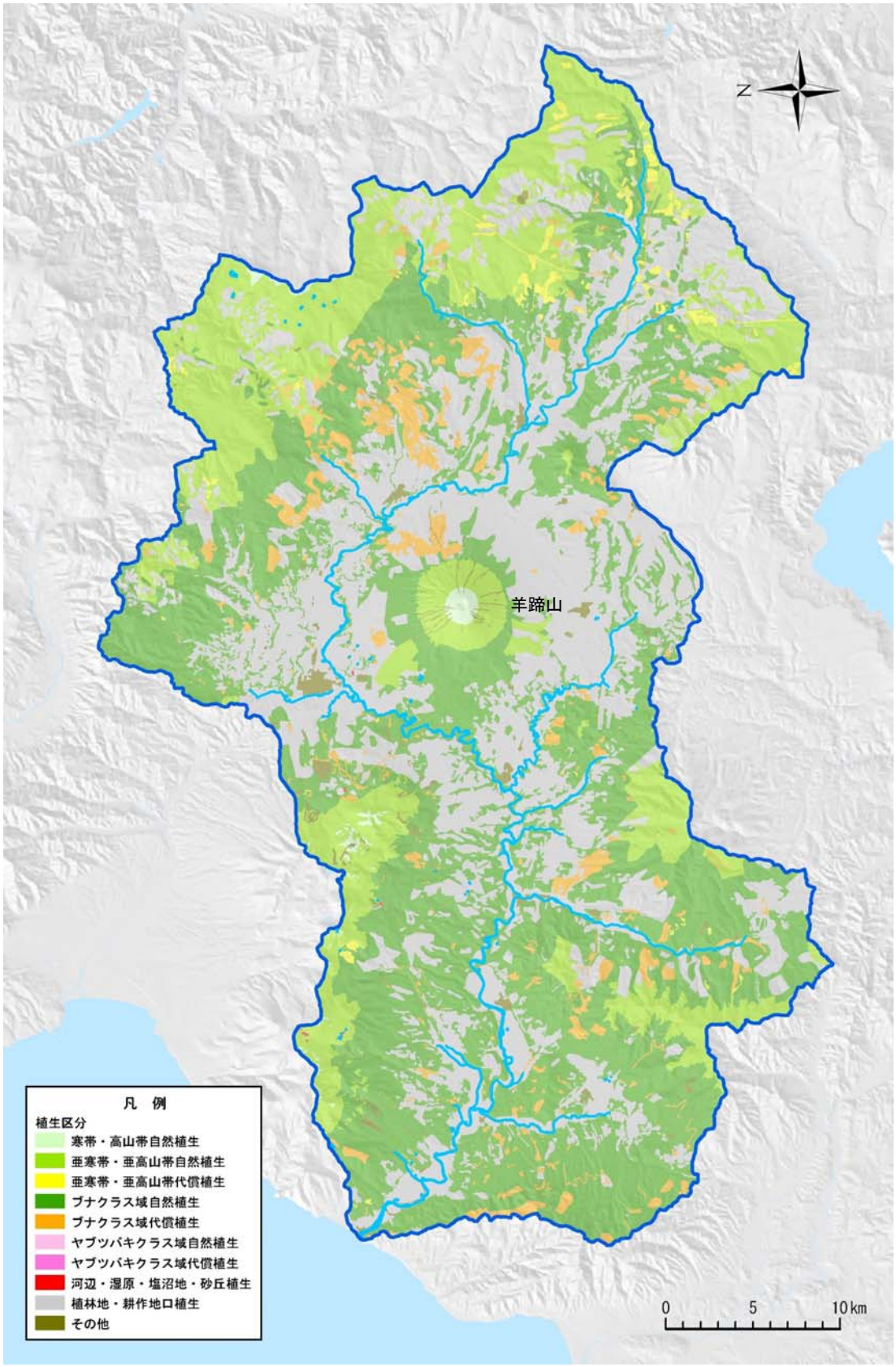
尻別川流域は羊蹄山、ニセコ山系をはじめ、豊かな自然とすぐれた自然景観に恵まれている。羊蹄山の一帯は「支笏洞爺国立公園」に指定されており、山頂付近の高山植物帯は、国の天然記念物に指定されている。

植生は図 2-1 に示すとおり、流域内はブナクラス域自然植生の占める割合が多く、寒冷帯特有の植生となっている。



尻別川上流の植生

資料：尻別川治水史



出典：植生環境省生物多様性センター

図　２－１　植生図

（哺乳類）

尻別川流域には、エゾトガリネズミ、エゾユキウサギ、エゾリス、エゾヤチネズミ、エゾタヌキ、キタキツネなどが生息している。ヤナギ低木林の占める高水敷では、エゾヤチネズミやキタキツネなどがよくみられる。

エゾユキウサギ

キタキツネ

（鳥類）

尻別川流域には、河口部の海浜植生、草原、樹林帯、山岳地域等、多様な自然環境を有しており、様々な種類の野鳥が生息している。河口付近にはセグロカモメ、オオセグロカモメ、カモメ、ウミネコなどの海鳥がみられる。河川には、オシドリ、マガモ、カルガモが生息しているほか、高水敷にはイソシギ、ハクセキレイ、ヤマセミ、カワセミがみられる。また、オジロワシ、ハイタカ、ハヤブサなどの猛禽類が確認されており、尻別川流域の自然環境が多様であることを表している。

オシドリ

ヤマセミ

（両生・は虫類）

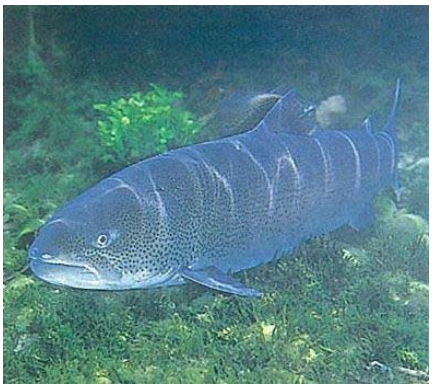
尻別川流域に生息する両生類は、水辺と樹林地を往来するエゾサンショウウオやエゾアカガエルなどが生息している。は虫類は、平地から低山地の森林、草原、水辺などでみられる、シマヘビやアオダイショウなどが生息している。

エゾサンショウウオ

エゾアカガエル

（魚類）

尻別川流域に生息する魚類は、海と川を行き来する回遊魚として、カワヤツメ、マルタ、キュウリウオ、アユ、シラウオ、サケ、サクラマス（ヤマメ）、ビリンゴなどが確認されている。淡水魚は、スナヤツメ、エゾウグイ、ドジョウ、イトウ、ニジマスなどが確認されている。絶滅危惧種であるイトウは、尻別川を代表する種に位置付けられており、市民団体が活発に保護活動を行っている。また、尻別川ではカワヤツメやアユの内水面漁業が営まれている。



イトウ

アユ

資料：小樽開発建設部

（昆虫類）

尻別川流域に生息する昆虫類は、山地から丘陵地にかけての湿地や山際の滞水などに生息するエゾトンボ、低山地から平地にかけての池沼・水田等の周辺に生息するノシメトンボがみられる。草本類が分布する高水敷にはハラオカメコオロギ、カンタン、ヒナバッタ、エゾシロチョウなどが生息しているほか、湿地にはカワラゴミムシ、樹林地にはエゾマイマイカブリが生息している。

ノシメトンボ

エゾシロチョウ

表 ２－１　尻別川の重要種

区分	NO	種名	指定区分				
			文化財保護法	環境省レッドデータブック	環境省レッドデータブック（2006更新）	北海道レッドデータブック	その他
植物	1	エゾエノキ				R	
	2	ノダイオウ		VU			
	3	シラネアオイ				Vu	
	4	オクエゾサイシン				R	
	5	ヤマネコノメソウ				R	
	6	ヤマタニタデ		VU			
	7	カタクリ				N	
	8	ミクリ		NT		R	
	9	オニスゲ				R	
	10	オタルスゲ				R	
両生類	1	エゾサンショウウオ			DD	N	
哺乳類	1	コテングコウモリ		VU		R	
鳥類	1	カンムリカイツブリ				Vu	
	2	ヒメウ			EN		
	3	ヒシクイ	天然	VU	VU	R	
	4	コハクチョウ				R	
	5	オシドリ			DD	R	
	6	シノリガモ		LP	LP	R	
	7	ミコアイサ				Vu	
	8	ミサゴ		NT	NT	Vu	
	9	ハチクマ		NT	NT	R	
	10	オジロワシ	天然	EN	EN	En	絶滅（国内）
	11	オオタカ		VU	NT	Vu	絶滅（国内）
	12	ハイタカ		NT	NT	Vu	
	13	ケアシノスリ				R	
	14	ハイイロチュウヒ				R	
	15	ハヤブサ		VU	VU	Vu	絶滅（国内）
	16	オオジシギ		NT	NT	R	
	17	ヨタカ			VU	R	
	18	ヤマセミ				R	
魚類	1	スナヤツメ		VU			
	2	マルタ				N	
	3	エゾウグイ				N	
	4	アユ				R	
	5	シラウオ				R	
	6	イトウ		EN		Cr	
	7	ヤマメ				N	
	8	カジカ				Vu	
	9	ルリヨシノボリ				R	
昆虫類	1	ハラオカメコオロギ				R	
	2	オオイナズマヨコバイ				R	
	3	スナヨコバイ		NT		R	
	4	キバネクロバエ				R	
	5	エダガタニクバエ				R	
	6	コヒメヒョウタンゴミムシ				R	
	7	サザナミヒメカゲロウ				R	
底生動物	1	モノアラガイ		NT			
	2	カワシンジュガイ		VU			
	3	エゾコオナガミズスマシ				R	

出典：河川水辺の国勢調査(H2～17)

・文化財保護法

天然：天然記念物　　特天：特別天然記念物

・環境省レッドデータブック（2006年12月に鳥類、両生類、爬虫類、その他無脊椎動物についてレッドリストの見直し）

EX：絶滅　　CR：絶滅危惧ⅠA類　　NT：準絶滅危惧
EW：野生絶滅　　EN：絶滅危惧ⅠB類　　DD：情報不足
CR+EN：絶滅危惧Ⅰ類　　VU：絶滅危惧Ⅱ類　　LP：地域個体群

・北海道レッドデータブック

EX：絶滅　　En：絶滅危惧種　　Lp：地域個体群
EW：野生絶滅　　Vu：絶滅危急種　　N：留意種
Cr：絶滅危機種　　R：希少種

・その他

絶滅：絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（平成4年）
（国内）国内希少野生動植物種　　（特国）特定国内希少野生動植物種　　（緊急）緊急指定種

２－２．河川及びその周辺の自然環境

(1) 上流部

源流部から喜茂別町付近までの上流部では約 1/60 以上の急勾配であり、山岳渓流の様相を呈しており、四季折々で様々な表情を見せる。

植生は、高山山頂や渓谷斜面でよく発達するササーダケカンバ群落やエゾイタヤーシナノキ群落が分布している。このような自然環境を反映して、国の天然記念物に指定されているオオワシなどの広い行動圏を必要とする種が確認されている。河岸にはヤナギ類を主とした河畔林と森林が連続しており、生態回廊（コリドー）として機能している。河道は、瀬や淵が連続的に形成され、多様な河川環境が創出されており、冷水環境を好むフクドジョウ、ニジマス、ヤマメ、ハナカジカなどが確認されている。

尻別川上流（喜茂別町双葉地区）

資料：尻別川写真集

(2) 中流部

喜茂別町付近から蘭越町付近までを流れる中流部は、河床勾配は約 1/130～1/250 程度となっている。流域のほぼ中央にそびえる羊蹄山を大きく迂回しながら幾多の支川を合わせ、ニセコの狭窄部を流下して蘭越町に至っている。また、安定した水量を利用した水力発電が 6 箇所で行われているが、全ての取水堰に魚道が設置されている。

河畔にはヤナギ類が発達し、ハルニレーヤチダモ林やケヤマハンノキ林などの自然林が分布している。清流河川にみられるバイカモやミクリなどの貴重な植物が生育している。河道は、蛇行が多く瀬と淵が形成され多様な環境を有しており、カワヤツメ、アユ、イトウ、ニジマス、ヤマメ、ハナカジカなどが確認されている。鳥類は、採餌場として河川を利用しているヤマセミなどのほかに、オオタカなどの猛禽類が確認されている。

尻別川中流（豊国橋付近）

資料：尻別川写真集

(3) 下流部

蘭越町付近から河口までは、河床勾配が約 1/500～1/5,000 程度となっており、大きく蛇行しながら流れ、日本海に注いでいる。沖積平野が広がるこの区間は、肥沃な土の堆積によって形成された土壌であること、尻別川の清流に恵まれていることから、管内最大の水田地帯となっている。

河畔にはヤナギ類が発達し、高水敷にはヤマタニタデ、カタクリ、ミクリなどの貴重な植物、河口部にはハマニンニク、ハマボウフウ、イソスミレなどの海浜植物群落が生育している。魚類は、カワヤツメ、アユ、イトウ、サケ、ヤマメなどが確認されている。また、目名川合流点付近より上流の河床材料は砂礫質であることから、アユの産卵床が多く確認されている。

鳥類は、高水敷の草地にオオジシギなどの草地性の鳥類や、穏やかな河川水面にはオシドリ、シノリガモなどが採餌場や休息場として利用している。また、清流河川に生息するカワシンジュガイや湿地環境を好むエゾサンショウウオやカワラゴミムシが確認されている。

尻別川下流（河口）

資料：尻別川写真集

２－３．特徴的な河川景観や文化財等

(1) 景観・景勝地

尻別川の流域のほぼ中央には、コニーデ型の山容がひときわ美しい、蝦夷富士と呼ばれる羊蹄山(1,893m)が位置している。羊蹄山は、高山植物の宝庫で種類が多いことで知られ、「後方羊蹄山(しりべしやま)の高山植物帯」として国の天然記念物の指定を受けている。また、「京極のふきだし湧水」は国内最大級のスケールといわれている。昭和 60 年には、環境庁の「名水百選」にも選ばれ、全国ブランドとなった。

羊蹄山

ふきだし公園

表 ２－２　主な観光対象

市町村名	名称	内容
蘭越町	大湯沼	湖底からぶくぶくとイオウ泉の熱湯を吹き出しその温泉を満々とたたえた沼で、周辺を流れる川のあちこちからもイオウ泉の湯が吹き出している。採勝遊歩道を巡る前に、隣接の自然展示館に立ち寄ると一層楽しみが増します。
	コックリ湖	樹齢200年から300年の古木がうっそうと茂っている、手つかずの大自然の中にひっそりとたたずんでいる。鳥のさえずりと、風の音以外何も聞こえない、秘境の風情が魅力。入口から徒歩（限定）で4km入った所にある。
	紅葉の滝	新見渓谷にある高さ約30mの滝。その名の通り、秋は特に美しい。
	貝の館	太古の時代の巨大な貝の化石や、宝石のように光る美しい貝が、世界中から集められ展示されている。隣には特産物の直売センターがあり、そちらでも貝にちなんだグッズが勢ぞろい。
ニセコ町	有島記念館	有島記念館の建つニセコの地は、有島の出世作「カインの末裔」の舞台ともなった所であり、父から引き継いだ広大なニセコの農場を、土地共有という形で小作人に無償で解放し、当時の社会に大きな反響を呼んだことでも知られています。
	道の駅ニセコビュープラザ	農産物の直売スペース、観光情報のインフォメーションと町内の特産品を置いている情報プラザ、24時間利用可能なトイレ棟がある。9:00～18:00まで情報プラザにて常駐の観光協会職員が応対してくれるので、周辺情報を知るにも便利。（7月～8月は19時まで）
	五色温泉郷	ニセコアンヌプリとイワオヌプリに挟まれた谷合いの温泉。夏は登山や沼巡りのベースキャンプとして人気です。冬は深い雪に囲まれ、その効能に昔から雪を乗り越え湯治に訪れる人もいた野趣溢れる露天風呂が旅情を誘います。
	昆布温泉郷	春の新緑、秋の紅葉が美しい渓流沿いに広がる、ニセコエリア最大の温泉郷。冬はスキーのベースキャンプとしても人気で、モイワ・アンヌプリスキー場とは目と鼻の先。古くから保養地として有名であり、北海道三大霊泉の一つとして数えられており、効能は確かでここから沸き出る塩化物炭酸水素泉は皮膚の角質や脂質を溶かしてくれる作用が強く、「美人の湯」と呼ばれ、親しまれています。
真狩村	羊蹄山自然公園	キャンプ場・テニスコート・グラウンドなど多彩な施設を備えた200ヘクタールの広いレクリエーションゾーン。
	八洲秀章音楽碑	日本レコード大賞や勲四等端宝賞叙勲などの功績を残した真狩村出身の作曲家八洲秀章氏の遺業を称えた碑。
	真狩川河川公園	「細川たかしの像」「開基百年モニュメント」が建立されており、村民や観光客の憩いの場になっている。
	まっかり温泉	最近湧いたばかりの温泉。露天風呂からは羊蹄山を一望できる。宿泊施設はありませんが、世界のユリ園コテージが隣接しています。
	レストラン・マッカリーナ	真狩産の四季折々の食材と羊蹄のおいしい水をベースに、本格的フランス料理を。「風のレストラン」をテーマに美しい自然と調和したおしゃれなレストランが誕生しました。シェフはＴＶでもお馴染みの菅谷伸一氏。お食事のほか、ご宿泊やパーティにもご利用いただけます。
	真狩フラワーセンター	心を和ませる花とのふれあいを家庭でも楽しんでもらいたいという想いから、フラワーセンターでは、豊富な種類の花壇苗や鉢花、カサブランカをはじめとする切り花、ハーブの種やユリ球根、ガーデニングなどの園芸資材、ドライフラワーやリースなどの花加工品、アロマテラピー関連商品などが勢ぞろいし、魅力的な『花』空間が広がっています。（身障者トイレあり）
	世界のユリ園コテージ	1,400平方メートルの敷地に、ユリの女王カサブランカやかぐわしいルレーブの他、新種のルッカやティバー等75種25,000株のユリが植栽されている「世界のユリ園」内にオープンしたコテージ。ここをステーションにまるでメルヘンの世界に遊ぶ新しいタイプのリゾートが楽しめます。
留寿都村	赤い靴公園	芝生ときれいな花の咲く赤い靴公園には、童謡「赤い靴」の主人公「きみちゃん」をモデルに作られた像があり、村のシンボルともなっています。
喜茂別町	喜茂別町民公園	温泉、アスレチック遊具15基、パークゴルフ場27ホール、テニスコートクレー2面、野球場、レストラン有り。
	フラワーストリート	国道276号の双葉・鈴川地区にあり、街路樹周辺に約20,000本の花苗が植えられ、通過する観光客の目を楽しませている。
	ふるっぷ温泉	平成8年2月に温泉湧出、同年8月に仮設浴場をオープン。羊蹄山、尻別岳が眺望でき、尻別川のせせらぎも聞こえてきます。神経痛などによいと好評。
京極町	ふきだし公園	昭和60年、環境庁の名水百選に「羊蹄のふきだし湧水」として選定される。1日約8万トンもの水量をふきだし、1年中6.5℃前後という冷たさを保ち、水質を守るため自然を大切にしている。遠方からも水を汲みに来る人で賑わう。大型遊具、イカダ、バーベキューコーナーがあります。
	京極温泉	ふきだし公園に隣接。露天風呂から眺める羊蹄山は格別。泡風呂やサウナもあり、ゆったりくつろげる大広間も完備。食道、売店も充実しており、京極町のリラックスゾーンです。
倶知安町	羊蹄山	標高1,898メートル、コニーデ型の富士山そっくりの秀峰。頂上を中心とする7,000ヘクタールは国立公園に指定されており、数々の高山植物（国の天然記念物）が生息しています。日本百名山の第九座。
	鏡沼	ニセコアンヌプリの北斜面に位置。まるで別天地を想わせるほどの静けさで、波静かな水面は、周りの景色を見事に映し出している。6月頃には、沼の周辺一面に綿毛に包まれた白い穂をつけたワタスゲの群落が咲き誇り、訪れる人の目を楽しませてくれる。

出展：尻別川治水50周年記念 大地を潤す尻別川　2006　小樽開発建設部
北海道観光総合データファイル　http://kanko.pref.hokkaido.jp/kankodb/index.htm
各市町村ホームページ

(2) 文化財

尻別川流域の主な文化財として天端山大仏寺本堂天井など流域開拓の歴史を物語る多くの文化財が存在している。また、先住民族の遺跡が蘭越とニセコに多数集中しており、流域一帯には古くから先住民族が生活していたことを示している。

1）文化財

・大仏寺本堂の天井画(倶知安町、指定有形文化財)

天端山大仏寺本堂天井画は、初代住職斎藤忍随(にんずい)によって描かれた作品である。忍随は秋田(あきた)の生まれ、曹洞宗永平寺で仏道を修め、明治 30 年頃北海道に渡り布教に努め、明治 32 年倶知安に入り、明治 40 年頃堂宇を建立した。

天井画は大正3年頃から描きはじめ､完成をみたのは大正7年と数年を費やしている。178 点の天井画は、山水画、肖像画、観音の図、花鳥図、さらに墨絵、彩色画などがあり、題材も十二支、教訓的逸話、修行図、仏画等々多様性に富んでいる。

昭和 46 年に倶知安町指定有形文化財の第 1 号に指定されている。

2）史跡

古くは今から 1 万年以上も前の旧石器時代(先土器時代)のものもあり、ニセコの西富遺跡、富士見遺跡がこれに相当すると考えられている。

蘭越の立川遺跡は旧石器時代から、新石器時代(縄文時代)への移行期にあたるもので、考古学上重要なものである。

縄文の遺跡としては、ニセコの狩太 6 遺跡、狩太 8 遺跡、倶知安の高砂遺跡、八幡遺跡などが挙げられる。またニセコの曾我北栄ストーンサークルは、約 3000 年前の縄文時代前期の墳墓であると推定されており、学術上貴重な遺跡である。また蘭越の港大照寺遺跡は、縄文時代に続く擦文時代の遺跡として注目されている。

・曾我北栄遺跡(北栄ストーンサークル)

ニセコ草創当時から縄文土器や磨製石器が発見されていた｡そして曽我にはストーンサークルが発見され、古くから人の住んでいた遺跡であろうと考えられていた。昭和 30 年に、従来発見された石器類とまったくちがった旧石器時代の道具類も発見されている。

表 ２－３　尻別川流域の文化財等指定一覧

指定区分	種別	名称	所在地	指定年月日	概要
町	無形民俗文化財	ニセコ赤坂奴	ニセコ町	平成2年8月20日	小樽市の住吉神社で赤坂奴の小頭をしていた陶山増太郎氏が、昭和7年の狩太神社祭の折に神輿渡御の先ぶれ役として奴振りを紹介したのが始まり。平成2年8月20日、ニセコ町無形文化財に指定され、現在「ニセコ町赤坂奴保存会」には約20名のメンバーがいる。
町	史跡	曽我環状列石	ニセコ町	平成2年3月5日	中心のサークルを取り囲むようにして全部で 5つのストーンサークルから構成されている。昭和26年駒井東京大学教授によって発掘され、約3,500年前の墳墓であろうと推測される遺跡であることがわかっている。
町	有形文化財/美工	大仏寺本堂の天井画	倶知安町	昭和46年3月30日	大仏寺初代住職斉藤忍隋が描いた178点からなる力作。昭和46年3月30日付で倶知安町指定有形文化財（第1号）に指定された。
町	無形民俗文化財	倶知安赤坂奴	倶知安町	昭和60年7月1日	昭和8年から倶知安神社例大祭で御輿渡御行列している倶知安町の無形文化財である。
町	無形民俗文化財	羊蹄太鼓	倶知安町	平成9年11月1日	昭和38年、高田緑郎さんによって作曲された和太鼓の演奏曲。倶知安の郷土芸能として未来へ継承すべき太鼓演奏曲であるとの観点から、平成9年11月1日無形民俗文化財に指定され、同時に羊蹄太鼓の保存、継承団体として「くっちゃん羊蹄太鼓保存会」が団体指定された。

出展：北海道教育委員会ホームページ　北海道の文化財　http://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/hk/bns/bun-hogo.htm
北海道文化資源DB　http://www.pref.hokkaido.jp/kseikatu/ks-bsbsk/bunkashigen/index.html
しりべしiネット　しりべしの観光ポイント　http://www.shiribeshi-i.net/marugoto/tourist
倶知安・史跡マップ　http://www.town.kutchan.hokkaido.jp/mpsdata/web/1075/Map.pdf

２－４．河川環境を取り巻く背景

河川の利用については、釣り、カヌーやラフティングが盛んであり、市街地周辺の高水敷では公園やパークゴルフ場が整備されおり、多くの人達に利用されている。尻別川と住民とのふれあいでは「全国アユ釣り大会」、「尻別川手作りカヌー下り」等のイベントをはじめ、近隣の小中学生等を対象に「川の自然観察」等が行われ、尻別川に対する親しみや関心が高まっている。

カヌー

川の自然観察会（水生生物調査）

全国アユ釣り大会

２－５．市民活動

尻別川は一年を通じて水量が安定していることから、道内でもカヌーやラフティングといった体験観光が盛んに行われている。近年は外国からの観光客も増加しており、雄大な自然を資源とした観光産業が盛んである。また、平成 11 年から平成 14 年まで 4 年連続、平成 16 年から 18 年と 3 年連続で清流日本一に輝いており、地域住民の誇りとなっている。こうした状況を背景として、河畔林再生を目指した「雪中植林」や地域の小学生による「サクラマス放流」、川の清掃活動として「尻別川クリーン作戦」、イトウの保護に取り組んでいる「オビラメの会」などの市民活動が活発に行われており、地域住民の関心が非常に高い。

尻別川クリーン作戦

稚魚の放流

雪中植林

カヌー

２－６．自然公園等の指定状況

流域には数多くの自然環境が残されており、その中でも特に重要なものについては自然公園としての指定を受けて保全されている。流域の中央部に位置する「支笏洞爺国立公園」、北西部の「ニセコ積丹小樽海岸国定公園」が自然公園法の指定を受けている。これらの自然公園の指定に加え、流域内には国指定の天然記念物である「後方羊蹄山の高山植物帯」がある。また、鳥獣保護区として指定されている箇所は４箇所であり、流域には数多くの貴重な自然環境が保全されている。

表 ２－４　各種保護地域指定一覧

保護区分	整理番号	市町村	鳥獣保護区域	区域	存続期間	備考
道	64	蘭越町	コックリ湖	磯谷郡蘭越町に所在する道有林後志管理区156林班09、10、33及び34の各小班、158林班01、02、31及び32の各小班並びに159林班02、05、06、09及び31から33までの各小班の区域　［特保］道指定コックリ湖鳥獣保護区のうち道有林後志管理区156林班09及び33小班、158林班01小班及び31小班並びに159林班05及び09の各小班の区域	平成16年10月1日 ～平成36年9月30日 （H16.9.28 第816号 ［特保 第817号］）	406ha［特保34ha］ 森林鳥獣生息地
	65	蘭越町	チセヌプリ	磯谷郡蘭越町字湯里に所在する道有林後志管理区172林班01、02、97小班の区域	平成18年3月13日 ～平成37年9月30日 （H18.9.30 第716号）	302ha 森林鳥獣生息地
	66	倶知安町	半月湖	虻田郡倶知安町字高嶺に所在する道有林倶知安経営区境界標北山25を起点とし、この点から同町字高嶺と同町字比羅夫との字界を北に進み同道有林境界標北山56に至り、この点から同道有林と民有地との境界を南東に進み同道有林境界標北山50に至り、この点から同道有林2林班と5林班との境界を南東に進み同道有林2林班、5林班及び10林班との境界に至り、この点から同道有林2林班と10林班との境界を南西に進み同道有林1林班、2林班及び10林班との境界に至り、この点から同道有林1林班08及び06小班と01小班との境界を西に進み同道有林境界標北山13に至り、この点から同道有林と民有地との境界を北に進み起点に至る線に囲まれた区域	平成13年10月1日 ～平成23年9月30日 （H13.9.28 第1631号）	229ha 森林鳥獣生息地
	67	京極町	京極	虻田郡京極町に所在する国有林倶知安事業区135林班から139林班まで（138林班イ小班の区域を除く）の区域	平成13年10月1日 ～平成23年9月30日 （H13.9.28 第1631号）	391ha 森林鳥獣生息地

出展：平成18年度鳥獣保護区等位置図（別冊編）

表　２－５　自然公園等の指定状況

種別	名称	指定日	面積(ha)
国立公園	支笏洞爺国立公園	昭和24年5月16日	99,473
国定公園	ニセコ積丹小樽海岸国定公園	昭和38年7月24日	19,009

表　２－６　天然記念物等指定状況

指定区分	種別	名称	所在地	指定年月日
国	天然記念物	後方羊蹄山の高山植物帯	倶知安町・京極町・喜茂別町・真狩村・ニセコ町	大正10年3月3日

出展：北海道教育委員会ホームページ　北海道の文化財　http://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/hk/bns/bun-hogo.htm

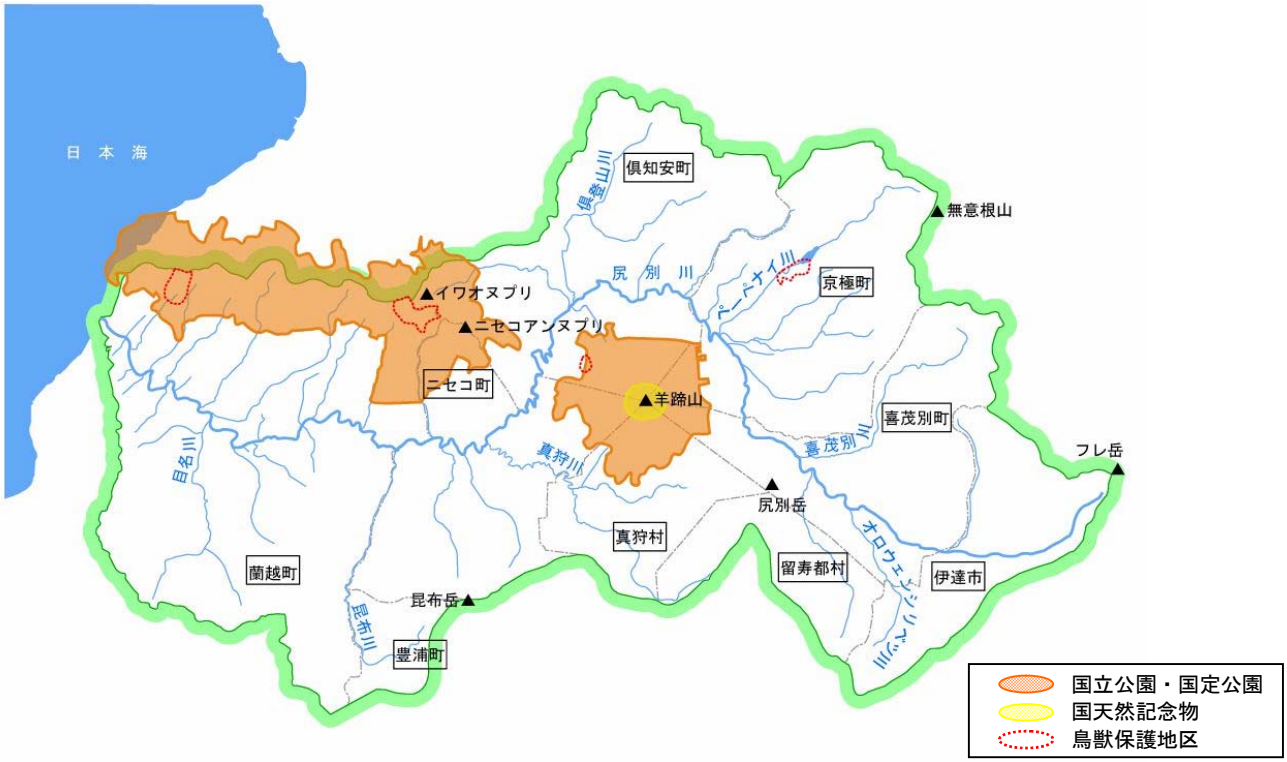
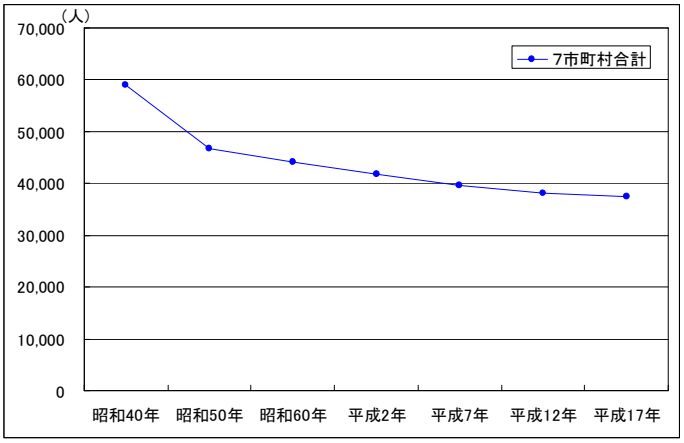


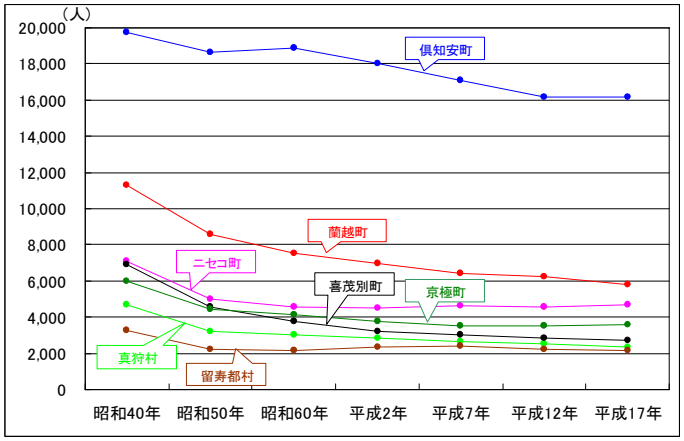
図　２－２　尻別川流域における自然環境概要図

３．流域の社会状況

３－１．人口

尻別川流域は、北海道後志管内の１市６町２村で構成されている。流域内５町２村の総人口は平成 17 年では 37,456 人となっており、近年では高齢化が進んでいる。





出典：北海道市町村勢要覧（S40～H17）

図　３－１　尻別川流域の関係市町村の人口変動

表　３－１　流域関係市町村人口に対する後志圏人口の割合の推移

	昭和40年	昭和50年	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
蘭越町	11,318	8,574	7,553	6,986	6,450	6,215	5,802
ニセコ町	7,086	5,003	4,593	4,511	4,641	4,553	4,669
真狩村	4,716	3,197	3,028	2,826	2,649	2,536	2,354
留寿都村	3,295	2,246	2,171	2,369	2,388	2,227	2,165
喜茂別町	6,898	4,544	3,749	3,240	3,029	2,843	2,707
京極町	6,011	4,439	4,125	3,775	3,489	3,505	3,583
倶知安町	19,738	18,668	18,892	18,030	17,078	16,184	16,176
流域関係町村人口（人）	**59,062**	**46,671**	**44,111**	**41,737**	**39,724**	**38,063**	**37,456**

出典：北海道市町村勢要覧（S40～H17）

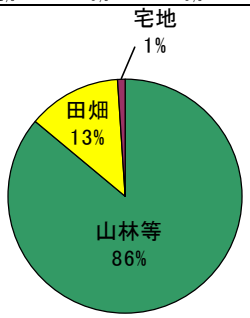
３－２．土地利用

流域の土地利用は、古くは明治期の開拓に始まり、治水事業や農地開発によって徐々に農地として利用されるようになり、昭和中期から後期にかけて宅地及び田が増加傾向にあり、山林・畑・その他は横ばい若しくは漸減傾向にある。現在の土地利用は、山林等が約86%、田畑が約 13%、宅地が約 1%となっている。

近年においては、約 2 万 ha の耕地が広がり、水稲・馬鈴薯・グリーンアスパラ・てんさい等の作付や畜産が行われており、尻別川流域は北海道内有数の農業地帯となっている。また、尻別川流域の上流部から中流部にかけては畑作が主で、下流部の蘭越町は管内最大の水田地帯となっている。

表 ３－２　地目別土地利用の割合

地目	田	畑	宅地	鉱泉地	池沼	山林	牧場	原野	雑種地	その他	計
蘭越町	35.28	11.00	3.12	0.01	0.04	188.47	1.97	33.03	5.66	171.11	449.69
ニセコ町	6.93	22.80	2.10	0.00	0.05	101.98	0.92	40.63	3.71	18.02	197.14
真狩村	0.87	30.27	1.26	0.00	0.06	37.21	1.29	10.81	2.94	29.73	114.44
喜茂別町	0.09	14.90	1.06	0.00	0.01	62.43	0.02	45.31	5.11	60.57	189.50
京極町	2.64	21.35	1.39	－	0.01	63.20	1.81	25.11	4.24	111.85	231.60
倶知安町	12.99	32.02	4.39	0.00	0.34	132.39	2.80	31.87	5.34	39.09	261.23
合計	58.80	132.34	13.32	0.01	0.51	585.68	8.81	186.76	27.00	430.37	1,443.60
割合	4%	9%	1%	0%	0%	41%	1%	13%	2%	30%	100%



出典：平成 17 年度北海道市町村勢要覧

図 ３－２　尻別川流域（市町村別）の土地利用

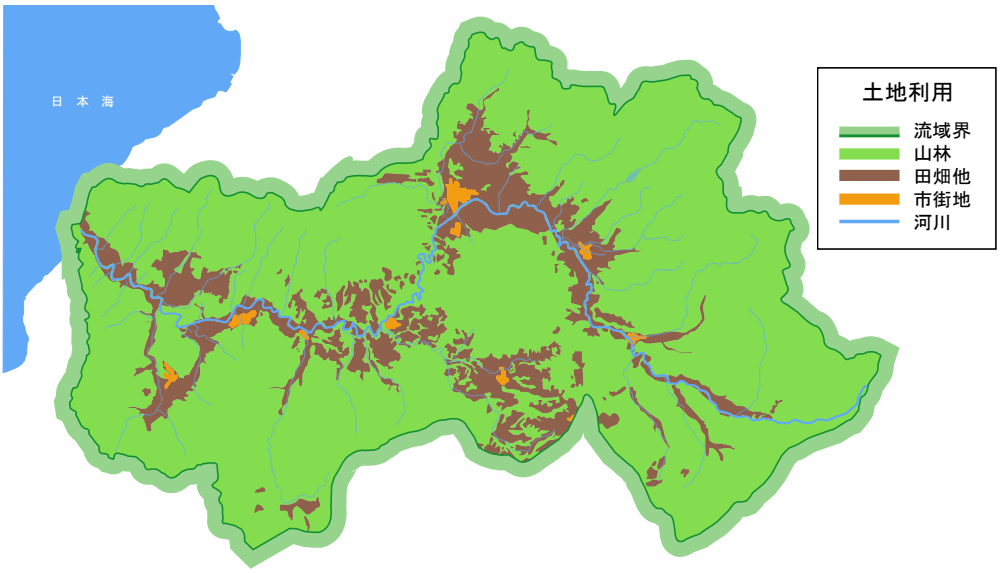
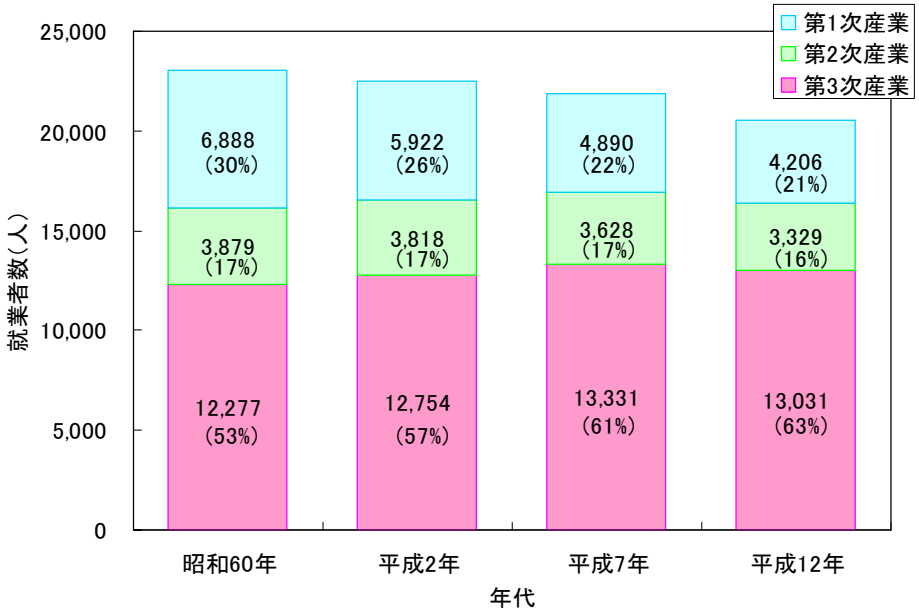


図 ３－３　尻別川流域の土地利用

３－３．産業・経済

流域自治体の産業別就業人口の推移を見ると、流域の産業はサービス業を主体としており、近年の第一次産業の衰退により第一次産業人口が減少し、第一次産業人口の割合が昭和 60 年の 32%に比べて平成 12 年では 21%まで減少しているが、第三次産業人口の割合は 53%から 63%に伸びている。

第 1 次産業就業人口の割合を町村別で見ると、真狩村で高く約 46%となっているが、第二産業就業人口の割合は、各町村とも約 8%から約 27%程度となっている。第三次産業は倶知安町で約 74%と比較的高く、その他の各町村でも約 46%から約 64%と高い割合を占めている。



出典：北海道市町村勢要覧（昭和 60 年～平成 17 年）

図　３－４　産業 3 部門別就業者数の推移

表　３－３　尻別川流域町村における産業別就業者数

	蘭越町		ニセコ町		真狩村		留寿都村	
	人口（人）	構成比（%）	人口（人）	構成比（%）	人口（人）	構成比（%）	人口（人）	構成比（%）
第1次産業	815	26%	565	24%	651	46%	411	30%
第2次産業	691	22%	288	12%	121	8%	128	9%
第3次産業	1, 670	53%	1, 509	64%	655	46%	812	60%
計	3, 176	100%	2, 362	100%	1, 427	100%	1, 351	100%

	喜茂別町		京極町		倶知安町		町村計	
	人口（人）	構成比（%）	人口（人）	構成比（%）	人口（人）	構成比（%）	人口（人）	構成比（%）
第1次産業	331	22%	491	25%	942	11%	4, 206	20%
第2次産業	258	17%	535	27%	1, 308	15%	3, 329	16%
第3次産業	937	61%	970	49%	6, 478	74%	13, 031	63%
計	1, 526	100%	1, 996	100%	8, 728	100%	20, 566	100%

出典：北海道市町村勢要覧（昭和 60 年～平成 17 年）

３－４．交通

尻別川流域内の交通網は図 3-5 に示すとおり、国道 5 路と道道 5 路が主要幹線と位置付けられている。国道は 5 号のほか、229 号、230 号、276 号、393 号の 5 路が整備され、道道は京極定山渓線、豊浦京極線、倶知安ニセコ線、岩内洞爺線、豊浦ニセコ線の 5 路が整備されている。

なお、鉄道では JR 函館本線を幹線として流域の中央部を縦断している。

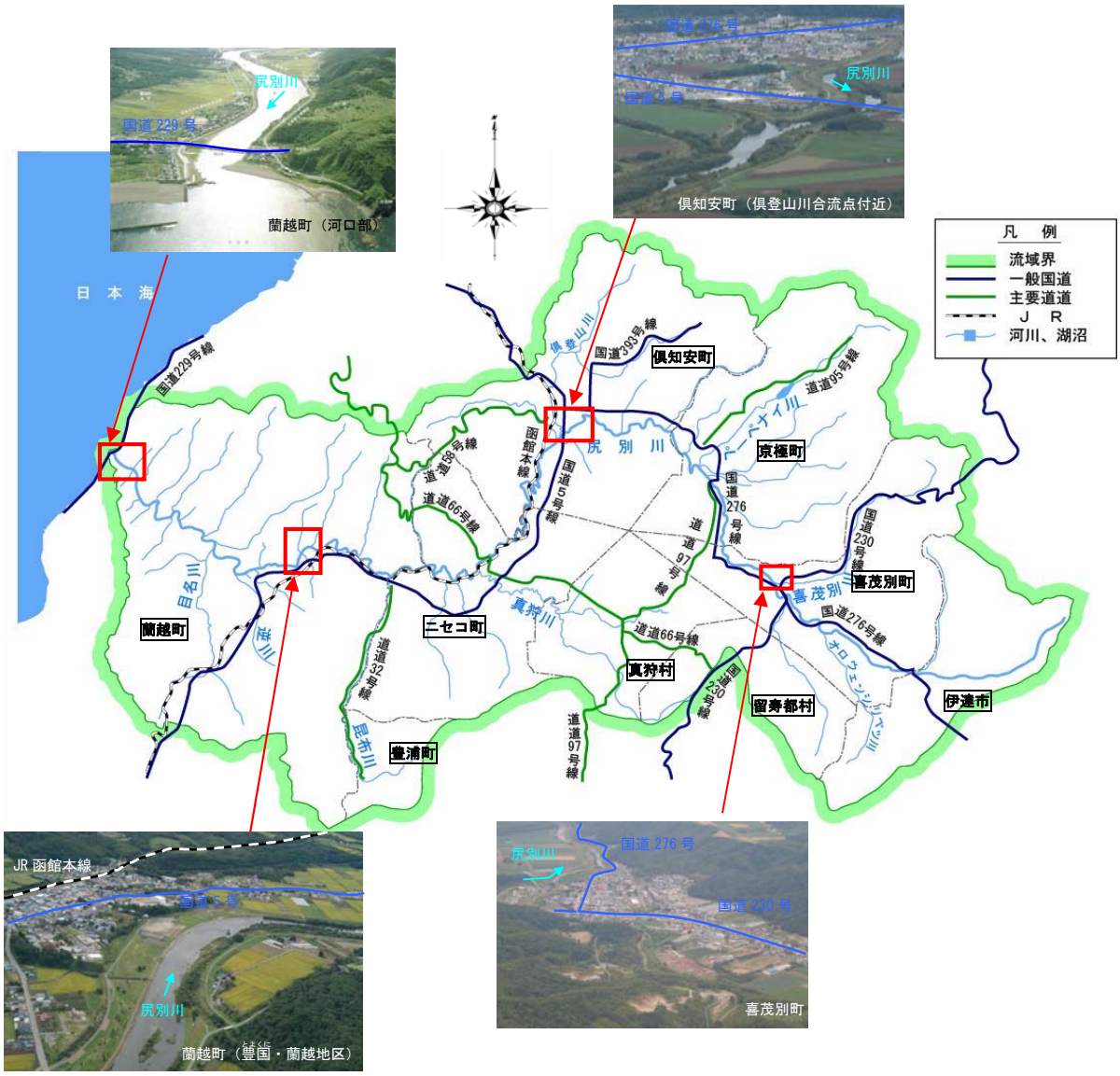


図　３－５　尻別川流域における交通網図

３－５．関係ある法令の指定状況

(1) 第６期北海道総合開発計画

北海道総合開発計画は、行政改革や国際化、地域環境問題への知見の集積などの大きな情勢の変化を受け、地球規模に視点をおいた食糧基地、北の国際交流圏の形成、観光・保養基地の形成や北海道が有する雄大な自然環境の保全、安全でゆとりのある生活環境の創出を目的としている。

これらの目的を重点的・効率的に推進していくための一方針として広域的・複合的な地域プロジェクトの推進を揚げており、複数の市町村が連携を図り、総合的に取り組むプロジェクトを支援してくものとしている。この地域プロジェクトの中には、尻別川水系の各河川が舞台となっているものもあり、河川事業に直接あるいは間接的に関連するものも少なくない。

(2) 地域プロジェクトおよび都市計画

尻別川流域に関連する主な流域プロジェクトとして、「シーサイドパークみなと構想」「喜茂別フラワーストリート構想」「ニセコ花フェスタ綺羅街道」「真狩村市街地再整備推進事業」「真狩特定築公園整備事業」「道の駅フラワーセンター事業」「ルスツリゾート開発事業」がある。

尻別川流域では、倶知安町において都市計画区域が指定されている。

表 ３－４　尻別川流域のプロジェクトおよび都市計画区域

プロジェクト名	概要	事業主体
シーサイドパークみなと構想	本町においては、日本海に面した美しい海岸線があって、零細ながらも漁業生産活動が行われている。 これらを生かした海浜の公園化を図ることを目的とする。 自然の触れ合いや学習とレクリェーション等が行える場の確保と雇用の場の創出、地域活性化と定住人口の増加が期待される。	蘭越町
喜茂別フラワーストリート構想	本町は、国道230号と国道276号の交わる支笏洞爺国立公園の主要観光コースの途上にあり、この構想を実現することにより、北海道、後志観光の玄関として、喜茂別町のイメージアップを図る。 地域ぐるみでの参加により、住民の連帯意識の高揚を図ることができる。	喜茂別町
ニセコ花フェスタ綺羅街道	道道岩内洞爺線、「綺羅街道」を中心に、新たなまちづくりの取組みとして「花」という素材にスポットを当て、美しく潤いのある街並みを創出し、美しい市街地景観づくりを行う。	ニセコ町
真狩村市街地再整備推進事業	これまでの街づくりをふまえ、官民一体となって、「住民福祉」「環境保全」「地域振興」を主要な視点として市街地再編を図るものである。	真狩村
真狩特定築公園整備事業	真狩川河川公園のエリアを含めて総合的駐車場の整備を中心に、周辺施設をつなぐ園路などを整備する。	真狩村
道の駅フラワーセンター事業	花をテーマとした観光拠点「真狩フラワーセンター」を道の駅として再整備し、施設の充実と運営体制の再構築を図り、観光入込みの増大による地域活性化を図ることを目的とする。	真狩村
ルスツリゾート開発事業	レジャー産業を一層拡大し、更に充実、発展させ、健全なレジャーが楽しめる都市近郊型のファミリーゾーンの形成を図る	留寿都村

出典：平成 19 年　地域プロジェクト総覧

出典：平成 19 年　地域プロジェクト総覧

４.水害と治水事業の沿革

４－１．既往洪水の概要

尻別川の主要洪水及び被害の概要について、表 4-1 に示す。

表 ４－１　尻別川の主要洪水の概要

洪水名	種別	降雨量(mm) 代表地点雨量	流量(m³/s) *は氾濫が無かった場合の推定流量	水位(m) は既往最高	備考
1909 明治 42 年 4 月 7～10 日	融雪	寿都　41	小南部　1,141	昆布　41.40	倶知安市街大氾濫 死者 2 人 *この洪水実績により計画流量を決定した。
1961 昭和 36 年 7 月 24～26 日	台風 ・ 前線	蘭越　221 倶知安　196 喜茂別　178	名駒　1,247 *1,355 喜茂別　362	名駒　8.76 昆布　41.50 喜茂別　172.66	被害家屋 1,963 戸 氾濫面積 7,051ha
1962 昭和 37 年 8 月 2～4 日	台風	蘭越　246 倶知安　277 喜茂別　216	名駒　1,366 *1,522 喜茂別　560	名駒　9.12 倶知安　◎172.87 喜茂別　260.65	被害家屋 1,969 戸 氾濫面積 13,850ha *連年の洪水により計画流量改定の主因となった。
1975 昭和 50 年 8 月 22～24 日	台風 ・ 前線	真狩　238 倶知安　148 喜茂別　211	名駒　1,493 *1,749 喜茂別　407	名駒　◎9.21 昆布　41.79 倶知安　172.08	被害家屋 408 戸 氾濫面積 3,508ha
1981 昭和 56 年 8 月 22～23 日	台風 ・ 前線	蘭越　154 倶知安　162 喜茂別　166	名駒　1,463 喜茂別　519	名駒　8.69 昆布　◎41.99 倶知安　172.17	被害家屋 318 戸 氾濫面積 3,572ha
1999 平成 11 年 7 月 28 日 ～8 月 2 日	全線性 低気圧	倶知安　101	名駒　1,385 蘭越　1,245	名駒　7.05 蘭越　12.78	被害家屋 8 戸 氾濫面積 315ha

*被害額は、その年の実数値である。
*昭和 50 年 8 月 22～24 日の被害額は、8 月 5～25 日の合計値である。

出典：小樽開発建設部調べ(H14)
尻別川水系工事実施基本計画参考資料
第Ⅱ編　水文資料

４－２．主な洪水の概要

(1) 明治 42 年 4 月の洪水

4 月 7 日から 10 日にかけて、本道西海上を北上した低気圧による暴風雨に融雪が加わり出水した。倶知安市街が氾濫、降雨量は 7 日に寿都 41㎜。

同年には、この実績(小南部(こなんぶ)地点 Q=1,141m^3/s)に安全を見こみ、計画流量が同地点より河口まで 1,252m^3/s と決定された。

(2) 昭和 36 年 7 月の洪水

7 月 24～26 日。前線が北海道に停滞して活発化し、前線上を低気圧が次々と通過したため豪雨となり、24 日夜半から 25 日にかけて後志地方一帯に降り続いた雨は、倶知安 196㎜、京極 196㎜、蘭越 221㎜、流域平均で 205㎜ 達し、尻別川、ペーペナイ川、ポンクトサン川、倶登山川(くとさんかわ)、喜茂別川、オロウエンシリベツ川が氾濫した。

被害は家屋の全・半壊 26 戸、床上床下浸水 1,963 戸、農作物被害面積 7,051ha、被害箇所 230 所、被害額 14 億 2,200 万円という大災害となった。名駒における最高水位は 8.76m、通過ピーク流量は 1,247m^3/s に達し、過去に例を見ない規模の大洪水であった。

昭和 36 年洪水　浸水した京極町市街地

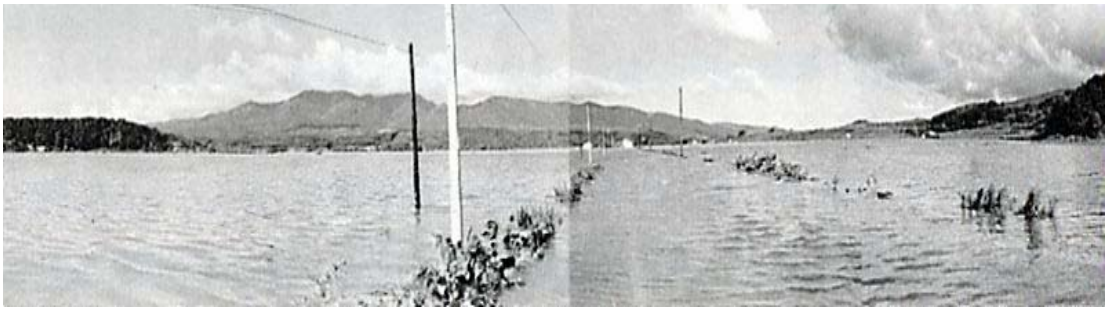
(3) 昭和 37 年 8 月の洪水

8 月 2～4 日。台風 9 号くずれの低気圧が本道南岸を通ったため豪雨にみまわれ、4 日未明から後志地方は暴風雨となった。2 日から降り続いた雨は、倶知安 277㎜、京極 259㎜、蘭越 246㎜、喜茂別 216㎜ に達し、尻別川流域は前年を上回る大洪水となった。名駒における最高水位は 9.12m、通過ピーク流量は 1,336m^3/s と過去最高だった前年の記録をさらに大きく更新した。

被害は家屋の全・半壊 25 戸、床上床下浸水 1,969 戸、農作物の被害面積 13,850ha、被害箇所 222 ヶ所で被害額は 12 億 8,100 万円という 2 年連続悲惨な災害となり、農家の打撃は大きかった。

尚、前年に引き続く大洪水の発生により、これが尻別川の当時における流量改訂の主因

となった。



昭和 37 年洪水　蘭越町　大谷地区

昭和 37 年洪水　蘭越町　名駒地区

(4) 昭和 50 年 8 月の洪水

8 月 22 日～24 日。これに先駆けて 19 日～20 日にわたり、台風 5 号くずれの温帯低気圧の影響で、流域平均雨量にして 125mm 程度の大雨が降り出水した。さらにそれに追い打ちをかせるように発生したのが、この大洪水である。22 日夜停滞した前線の活動が、台風 6 号の接近により活発となって降雨が始まり、23 日昼頃から夜半すぎまで本格的な強い雨が降り続いた。降り始めからの雨量は、ニセコ 257mm、真狩 238mm、喜茂別 211mm、京極 223mm、倶知安 148mm となり、特にニセコでは 23 日 17～19 時に 70.5mm という集中豪雨となった。日雨量についてもニセコで 23 日、194.5mm と今回流域内最大となり、喜茂別でも 160mm で記録を更新した。22 日～24 日における流域平均雨量は 185mm という大きなものであった。

尻別川では 23 日 22 時から 24 日 6 時にかけ、各観測所で警戒水位を超えた。名駒では 23 日 19 時に突破し、24 日 5 時には 9.21m の最高水位となり、計画高水位にあと 32cm とせまり、通過ピーク流量は 1,493m^3/s という記録的なものであった。これは計画高水流量に対し、87%という大きな流出となり、昭和 37 年洪水時のものを上回った。

尻別川流域の氾濫面積は外水氾濫が 382.5ha、内水氾濫が 159.3ha に達した。外水氾濫

のうち 23 日 20 時に左岸米子(よなご)築堤で溢水をおこした。また総氾濫量は 1,090 万 m^3 に及んだ。

このように大規模な出水のため、被害は床下床上浸水 408 戸に達し、農作物被害、土木被害とも極めて大きく、被害総額は 56 億 6,000 万円にのぼった。

昭和 50 年洪水　蘭越町　蘭越地区

昭和 50 年洪水　京極町

(5) 昭和 56 年 8 月の洪水

この年の 8 月には、上旬と下旬の 2 度にわたって洪水が発生した。1 回目は 3 日から 6 日にかけて、北海道中央部から南西部で停滞した前線に台風 12 号が合流して活動が活発化し、全道的に大雨となったことによる。尻別川流域内の降り始めからの降雨量は、下流域における蘭越では 100㎜ に達しなかったが、上流部では多く、喜茂別で 227㎜ を記録した。また流域平均では 143㎜ となり、各地で被害が発生したものの、既往洪水との比較では水位・流量規模とも比較的小さなものであった。しかしながら昭和 50 年 8 月洪水以降では最大のものとなった。

名駒観測所での最高水位は 6.32m、通過ピーク流量は 736m^3/s。この洪水における被害のうち、最も大きな被害額になったのは土木被害で、あわせて 28 ヶ所、11 億 1,450 万円に達した。次が農作物被害で 4 億 7,250 万円となり、畑の被害がほとんどである。また床下浸水は 29 戸で、尻別川流域内における総被害額は 16 億 1,500 万円となった。

全道的には、この上旬洪水の被害が大きくなったのが特徴的である。

下旬洪水は 21 日から 23 日にかけて、前線活動と台風 15 号によって全道的な暴風雨となり、発生したものである。尻別川流域内における降り始めからの総雨量は、喜茂別 166㎜、倶知安 162㎜、蘭越 154㎜ となった。

尻別川では名駒より上流の各水位観測所において、最大規模と考えられていた昭和 50 年 8 月洪水より大きな水位を記録し、名駒における最高水位は 8.69m、通過ピーク流量は

1,463m³/s で、総体的にみて既往 1～2 位という大きな出水となった。

流域内の被害も非常に大きく、床下浸水以上の家屋は 318 戸、被災者は 1,115 名におよび、農作物被害面積は 3,572ha にもなり、農業被害額は全体では 19 億円を超える大きなものとなった。土木物被害においてはさらに大きく、河川 204 ヶ所、道路 57 ヶ所、橋梁 5 ヶ所の合計 266 ヶ所で約 48 億円という莫大な被害を被った。特に大きな被害となったのは喜茂別町で 27 億 2,700 万円、次に蘭越町で 12 億 7,800 万円というものであり、流域内における総被害額は 68 億 7,480 万円にものぼった。

昭和 56 年洪水　蘭越町　冷水地区

昭和 56 年洪水　喜茂別町

昭和 56 年洪水　喜茂別町

昭和 56 年洪水　オロッコ川(京極町)

(6) 平成 11 年 7 月～8 月の洪水

7 月 28 日から 8 月 2 日にかけて、全線性の低気圧により、倶知安で 101mm、喜茂別で 311mm の降雨量を記録し、昭和 56 年 8 月洪水以降最大のものとなった。水位および流量は、名駒地点で 7.05m、1,385m^3/s、蘭越地点で 12.78m、1,245m^3/s となった。被害は、蘭越町で約 3 億円にものぼった。

平成 11 年洪水　旧蘭越 2 号樋門付近の状況

平成 11 年洪水　蘭越町ランラン公園の状況

４－３．治水事業の沿革

尻別川の治水事業は、明治 39 年から同 41 年にかけて、河口から 84 km 間の地形及び水準測量を実施し、10 個所の水位観測所を設置したことに始まる。明治 42 年には融雪期に倶知安町で大きな氾濫があり、この時の小南部観測所で観測された流量に基づいて尻別川の計画高水流量を 1,252m^3/s とし、以来この流量をもって改修工事を進めることとなった。明治 43 年の第１期拓殖計画では、尻別川は北海道の重要 26 河川に取り入れられ、大正 11 年から局部的に護岸、流木除去等の工事を進めていった。

昭和 27 年に北海道総合開発計画において直轄河川改修費が計上され、昭和 28 年から上流部の喜茂別築堤に着手した。昭和 31 年には河口から 24.2km が国により直接改修工事を行う直轄区間として指定され、蘭越築堤工事に着手した。昭和 32 年には尻別川河川改修全体計画を策定し、計画高水流量を蘭越観測所地点で 1,100 m^3/s とした。昭和 35 年からは湾曲の著しい区間であった本川 3 箇所、支川 1 箇所の捷水路工事に着手するなど改修工事を進めていった。

しかし、昭和 36、37 年と相次いで未曾有の洪水に見舞われ、尻別川周辺は一面の泥海と化した。この洪水を契機として計画規模の見直しを行い、昭和 39 年に名駒観測所における計画高水流量を 1,700 m^3/s と改定した。

昭和 42 年 5 月には一級河川の指定を受け、河口から蘭越町まで 24.2 km を指定区間外区間とした。昭和 43 年 2 月には計画高水流量を昭和 39 年改訂流量とした尻別川水系工事実施基本計画を策定し、堤防の新設、拡幅および掘削を行い河積を増大し、水衝部には護岸、水制を施工して洪水の安全な流下を図った。

昭和50年8月洪水の名駒観測所における洪水流量は計画高水流量を上回ったことから、計画高水流量の再検討を行い昭和 59 年に名駒観測地点における基本高水のピーク流量を 3,300m^3/s とし、ダムにより 300m^3/s を調節し、計画高水流量を 3,000m^3/s とする工事実施基本計画の改定を行った。

この計画では、沿川の土地利用状況等を考慮し川幅及び計画高水位は基本的に変更せず、低水路の拡幅、高水敷の掘削等により必要な河積を確保するとともに、堤防については、その安定性を確保するため所要の拡築、補強を行うこととした。昭和 59 年から各築堤工事は新断面により施工し、河川法施行例第 2 条第 7 号区間を除いてほぼ完成している。

平成 2 年より現在の多自然川づくりの先駆けともいえる AGS(Aqua Green Strategy)工法による護岸整備等が行われた。

平成 5 年には、北海道南西沖地震が発生し、堤防・護岸・樋門が被災を受け、迅速な復旧工事を行った。

近年では、さらなる治水安全度の向上のため、光ファイバー整備等による河川情報のネットワーク化、内水排水施設の整備、水防拠点の設置などを行っている。

砂防事業については、支川において北海道が昭和 33 年から砂防ダム等を整備している。

表 ４－２　尻別川水系治水事業年表(1/2)

年 月 日	記　　事
明治 6 年	開拓使本庁から国・郡・村の調査のため福士成豊の一行が派遣され、尻別川尻を起点に昆布川合流点まで遡り、水路里程 9 里余、落差 160 尺であることを定める(官庁による初めての実地測量)
明治 29 年	河川法公布
明治 30 年	砂防法公布、尻別の後藤竹次郎、帆前船により尻別川で運送業を始める
明治 34 年	北海道 10 年計画(明治 34～43 年)策定
明治 39 年	北海道庁、土木工事取締規則制定
	9 月、河口、昆布、倶知安で水位観測開始
明治 40 年	2 月、寒別で水位観測開始
明治 41 年	12 月、喜茂別で水位観測開始
明治 43 年	北海道第一期拓殖計画(明治 43～昭和元年)発足による治水計画に基づき、尻別川の高水流量を 1,252m^3/s とし、尻別川の河川改修に着手
	浚渫工事(流木除去)行う
大正 2 年	北海道第二期拓殖計画(昭和 2～21 年)樹立
大正 6 年	北海道第一期拓殖計画を改定、計画年限を 2 カ年延長
	河川巡査員の配置
大正 8 年	拓殖計画改定、総工費 601 万円で大正 12 年から継続し 9 カ年計画樹立
大正 11 年	昭和元年まで尻別川護岸工事着手(総延長 1,634m)
昭和 2 年	北海道第二期拓殖計画(昭和2～21年)策定
昭和 10 年	5 月、河川堰堤規則公布
	北海道第二期拓殖計画改定案樹立
昭和 12 年	河水調査協議会設置(企画院)
昭和 21 年	北海道第二期拓殖計画終了
昭和 24 年	北海道総合開発審議会設置
昭和 25 年	12 月、知来別川護岸工事竣工
昭和 26 年	7 月、北海道開発局設置
昭和 27 年	第 1 期北海道総合開発第 1 次 5 カ年計画(昭和 27～31 年)策定
	上流部で築堤に着手
昭和 30 年	尻別川改修工事に着手(大谷より河口に至る流域 32km)
昭和 31 年	尻別川蘭越改修事業所設置
	多目的ダム法公布
昭和 32 年	10 月、目名川改修護岸工事竣工
	尻別川河川改修全体計画策定
	第 1 期北海道総合開発第 2 次 5 カ年計画(昭和 33～37 年)策定
昭和 33 年	蘭越築堤に着手
	尻別橋災害復旧工事着手
昭和 34 年	第 1 次治水事業 5 カ年計画(昭和 35～39 年)策定
昭和 35 年	治山、治水緊急措置法、治水特別会計法公布、治山、治水 10 カ年計画策定
	12月、尻別川改修、ワッカタサップ川砂防工事着手
	12 月、ペーペナイ川砂防工事完成
	逆川捷水路浚渫着工
昭和 36 年	糸川橋災害復旧工事着工
昭和 37 年	三豊橋災害復旧工事着工
昭和 38 年	第 2 期北海道総合開発計画(昭和 38～45 年)策定
昭和 39 年	新河川法公布

資料：尻別川治水 50 周年記念　大地を潤す尻別川　小樽開発建設部

表 ４－２　尻別川水系治水事業年表(2/2)

年 月 日	記　　事
昭和 40 年	第 2 次治水事業 5 カ年計画(昭和 40～44 年)策定 礼文華川改修工事竣工 逆川、初田捷水路浚渫完了
昭和 41 年	9 月、オロッコ川改修 3 カ年工事完成 10 月、尻別川一級河川昇級に伴いオロッコ川、カシプニ川、ガル川、トド川を道費河川に昇格
昭和 42 年	尻別川が一級河川に指定され、それに伴い、尻別川工事実施基本計画を定め、計画に基づき工事を実施、尻別川改修総体計画策定 オホナイ川河岸災害復旧工事着工
昭和 43 年	第 3 次治水事業 5 カ年計画(昭和 43～47 年)策定 大岸地内芝伏川改修工事竣工
昭和 45 年	12 月、水質汚濁防止法公布 目名川の本・支流を資源保護水面に指定、年間を通し禁漁とする
昭和 46 年	第 3 期北海道総合開発計画(昭和 46～55 年)策定
昭和 47 年	第 4 次治水事業 5 カ年計画(昭和 47～51 年)策定
昭和 49 年	尻別川総体計画改定
昭和 51 年	河川管理施設等構造令公布(10 月 1 日施行)
昭和 52 年	第 5 次治水事業 5 カ年計画(昭和 52～56 年)策定
昭和 53 年	新北海道総合開発計画(昭和 53～62 年)策定 磯谷、初田、御成、沼の沢地区で河道拡幅浚渫着工
昭和 56 年	尻別川環境整備事業に着手
昭和 57 年	第 6 次治水事業 5 カ年計画(昭和 57～61 年)策定
昭和 59 年	3 月、尻別川水系工事実施基本計画改定 尻別川蘭越改修事業所を蘭越河川事業所と改称
昭和 62 年	第 7 次治水事業 5 カ年計画(昭和 62～平成 3 年)策定 8 月、豊浦水力発電所建設に対し、河川法による建設大臣および知事認可(9 月着工)
昭和 63 年	第 5 期北海道総合開発計画(昭和 63～平成 9 年)策定 尻別川水系工事実施基本計画(第 3 回改定)
平成元年	尻別川水系河川環境管理基本計画策定
平成 3 年	2 月、海岸環境整備事業着工
平成 4 年	第 8 次治水事業 5 カ年計画(平成 4～8 年)策定 3 月、喜茂別河川公園整備事業スタート
平成 5 年	7 月、北海道南西沖地震により尻別川に大きな被害を受ける。
平成 7 年	5 月、尻別川の桜づつみ事業の建設省認定証伝達式 10 月、尻別川連絡協議会主催「95 尻別川フォーラム」を山村開発センターで開催
平成 9 年	河川法改正、第 9 次治水事業 7 カ年計画(平成 9～15 年)策定 大曲地区水防資材庫完成
平成 10 年	第 6 期北海道総合開発計画(平成 10～19 年)策定
平成 13 年	1 月、国土交通省設置 水防法改正 水辺の楽校開校式(名駒町)
平成 14 年	尻別川が 4 年連続、清流日本一となる
平成 16 年	尻別川が再度清流日本一に

資料：尻別川治水 50 周年記念　大地を潤す尻別川　小樽開発建設部

５. 水利用の現状

５－１． 水利用の現況

河川水の利用については、古くから農業用水、鉱工業用水、発電用水などに利用され、農業用水として約 6,050ha におよぶ農地かんがいに利用されているほか、水力発電については、6 箇所で最大出力約 40,900kw の電力供給が行われている。

表 ５－１　尻別川水系の水利用現況表

種　　別	件数	取水量(m³/s)
農 業 用 水	173	15.54
発 電 用 水	7	402.59
工 業 用 水	5	0.23
水 道 用 水	3	0.09
そ　の　他	13	2.22
合　　計	201	420.67

参考文献:一級水系水利権調書(北海道開発局) 平成 18 年 12 月現在

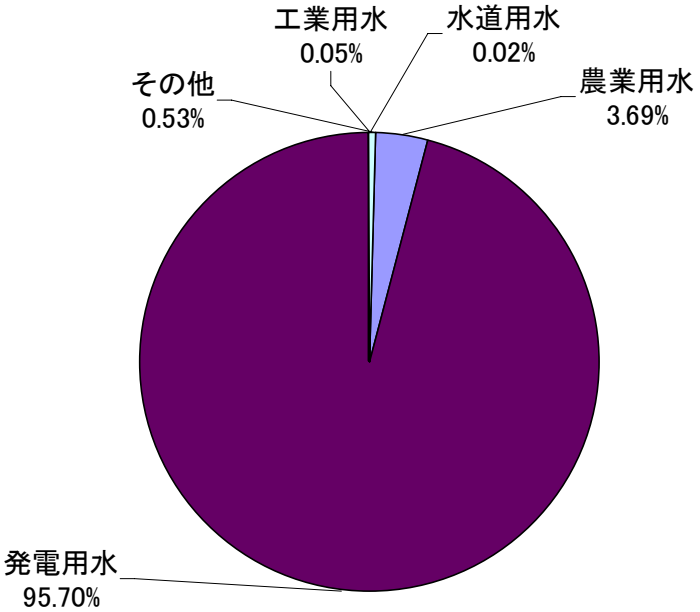


図 ５－１　尻別川水系の目的別水利用割合図

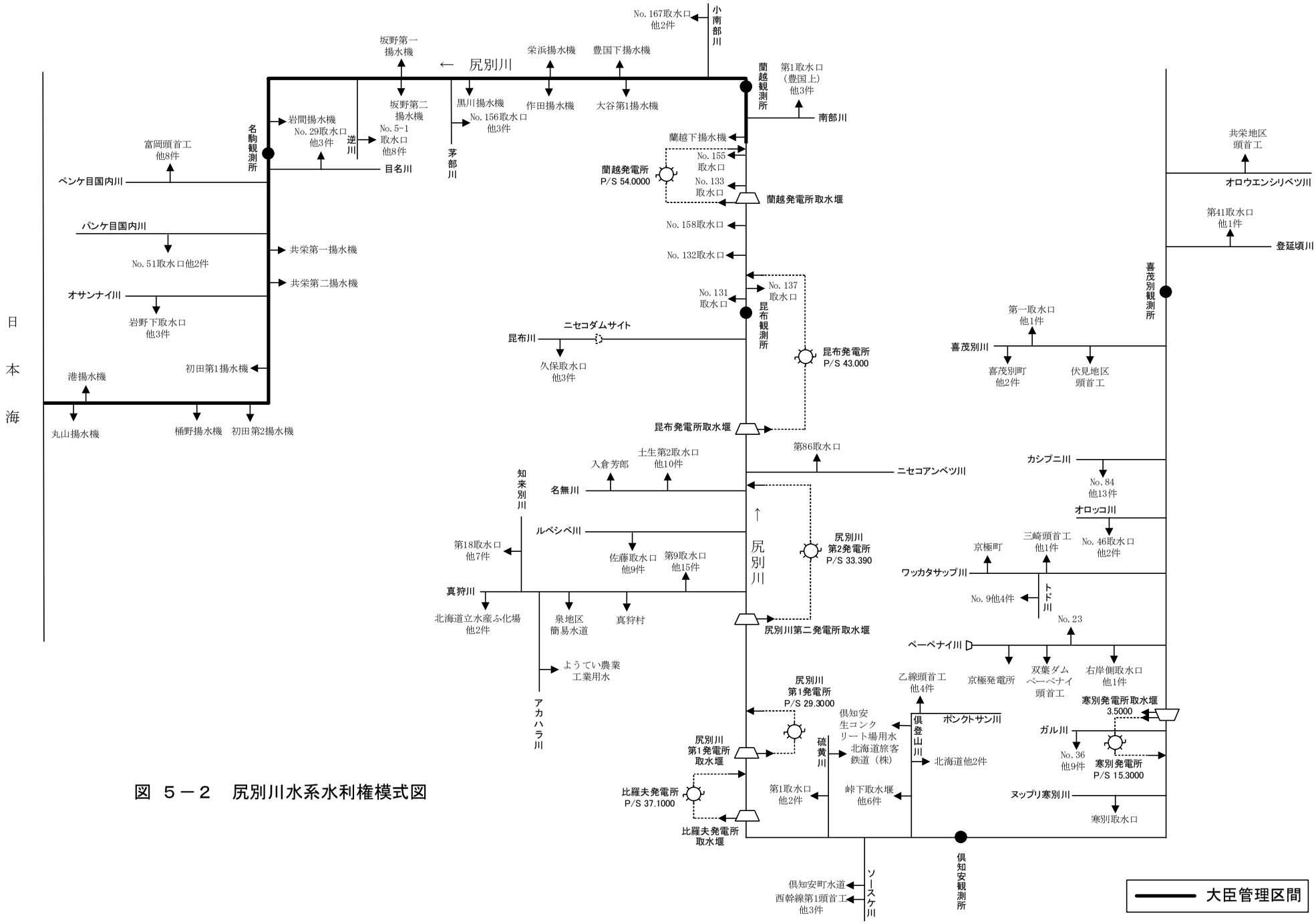


図 ５－２　尻別川水系水利権模式図

６.河川流況及び水質

６－１．河川流況

名駒地点における流況は表 6-1 のとおり、昭和 40 年から平成 17 年までの 41 年間の平均で、低水流量約 33.0m³/s、渇水流量約 25.4m³/s となっている。

表 ６－１　主要地点の流況表

年	データ数	欠測数	流量(m³/s)						
			最大	豊水	平水	低水	渇水	最小	年平均
S40	365	－	656.20	83.24	48.71	36.73	28.56	27.89	91.31
S41	365	－	650.10	109.99	59.43	48.04	36.72	32.26	101.38
S42	365	－	584.36	84.62	56.83	41.96	31.19	30.69	78.02
S43	366	－	499.03	76.02	45.60	33.32	26.16	25.00	69.58
S44	365	－	278.95	73.32	47.49	38.31	26.42	23.03	65.25
S45	365	－	757.87	72.64	47.13	38.51	28.77	28.30	90.15
S46	365	－	255.30	70.76	44.58	41.08	34.20	30.81	66.49
S47	366	－	382.53	86.90	58.70	37.94	36.02	30.17	79.98
S48	365	－	407.03	74.19	49.05	36.18	28.67	27.02	78.14
S49	365	－	682.17	83.06	52.48	39.54	32.32	32.32	83.38
S50	365	－	1091.56	80.34	57.28	46.06	31.01	30.81	88.30
S51	366	－	406.58	58.25	43.98	34.39	18.89	17.07	66.39
S52	365	－	601.79	87.24	62.38	39.03	24.94	20.89	88.93
S53	365	－	489.58	57.08	37.38	27.97	23.96	22.64	63.57
S54	365	－	393.35	60.01	39.01	28.85	23.36	21.03	60.68
S55	366	－	331.28	63.53	37.47	29.37	22.66	20.40	61.51
S56	365	－	985.89	90.60	50.18	36.50	24.24	22.62	85.07
S57	365	－	590.94	56.48	33.36	27.88	23.35	22.40	72.81
S58	365	－	318.70	58.16	37.18	29.88	24.34	22.76	58.62
S59	366	－	552.40	37.84	27.68	22.56	19.09	17.98	55.53
S60	365	－	355.92	42.21	30.47	22.74	17.14	15.78	50.43
S61	365	－	563.24	55.33	33.84	27.77	23.07	21.19	65.94
S62	365	－	553.06	50.08	32.92	25.64	20.14	19.43	60.55
S63	366	－	506.47	76.86	42.59	26.36	22.02	19.56	71.93
H1	365	－	203.90	63.94	42.98	32.82	21.38	18.47	53.34
H2	365	－	365.15	72.11	46.56	32.47	22.19	20.20	62.59
H3	365	－	434.53	52.98	36.07	28.12	20.74	19.79	55.44
H4	366	－	256.99	65.42	41.23	28.32	21.20	19.73	56.17
H5	365	－	240.88	55.25	33.91	26.90	22.33	18.22	52.29
H6	365	－	491.97	69.96	38.38	28.17	22.23	20.16	70.35
H7	365	－	487.21	81.17	51.10	35.95	26.18	25.07	69.14
H8	366	－	669.27	62.31	43.56	35.21	26.23	25.06	69.98
H9	365	－	504.82	71.51	44.85	31.09	24.29	22.85	64.83
H10	365	－	401.17	61.69	40.03	30.82	26.16	24.11	59.48
H11	365	－	909.24	58.58	41.67	32.55	24.14	22.58	72.18
H12	366	－	700.83	69.33	42.46	35.80	30.03	28.93	72.56
H13	365	－	395.44	58.45	38.76	31.55	26.02	24.65	63.95
H14	365	－	338.30	62.86	40.38	30.71	26.24	23.83	58.79
H15	365	－	262.56	50.97	35.62	29.32	24.67	21.95	54.00
H16	366	－	318.22	62.09	39.57	31.40	23.38	22.06	59.17
H17	365	－	463.94	62.49	41.93	33.30	25.38	21.13	75.01
最 大			1091.56	109.99	62.38	48.04	36.72	32.32	101.38
平 均			496.07	67.56	43.29	32.95	25.37	23.44	68.86
最 小			203.90	37.84	27.68	22.56	17.14	15.78	50.43
近年41年間(S40～H17)第4位			256.99	50.97	33.36	26.36	20.14	18.22	54.00
近年40年間(S41～H17)第4位			256.99	50.97	33.36	26.36	20.14	18.22	54.00
近年30年間(S51～H17)第3位			256.99	50.08	32.92	25.64	19.09	17.98	53.34
近年20年間(S61～H17)第2位			240.88	50.97	33.84	26.36	20.74	18.47	53.34
近年10年間(H8～H17)第1位			262.56	50.97	35.62	29.32	23.38	21.13	54.00

注1)流域面積:1,402.2km²

６－２．河川水質

水質については、河口から京極町のペーペナイ川の合流点までは B 類型、ペーペナイ川合流点から喜茂別町の喜茂別川合流点までが A 類型、それより上流では AA 類型に指定され、近年は、全川に亘り環境基準値を満たしており、平成 11～14 年、16～18 年に水質ランキング日本一になるなど、良好な水質を維持している。

表 ６－２　環境基準類型指定状況

水域名	該当類型	達成期間	基準地点名	備考
尻別川上流 (喜茂別川合流点から上流(喜茂別川を含む))	AA	イ	相川橋(喜茂別)	
尻別川中流 (喜茂別川合流点からペーペナイ川合流点まで(ペーペナイ川を含む))	A	イ	目名橋	
尻別川下流(1) (目名川の全域)	A	イ	名駒捕獲場	
尻別川下流(2) (ペーペナイ川合流点から下流)	B	ロ	名駒(名駒水位観測所)	
尻別川下流(3) (真狩川の全域)	C	ロ	真狩橋	

注 1)達成期間の「イ」は直ちに達成、「ロ」は 5 年以内で可及的速やかに達成を意味する。
注 2)環境基準（かんきょうきじゅん）：環境の質がどの程度のレベルに維持されることが望ましいという目標
注 3)類型指定（るいけいしてい）
：特定の水域の浄化目標を設定するために、環境基準の中から目標とする類型を指定すること

図 ６－１　尻別川水系水質環境基準地点及び類型指定区間

尻別川流域における観測地点の水質は図 6-2 に昭和 52 年から平成 17 年までの 29 ヵ年の水質(BOD75%値)の経年変化を示す。なお、いずれの地点においても環境基準を満たしている。

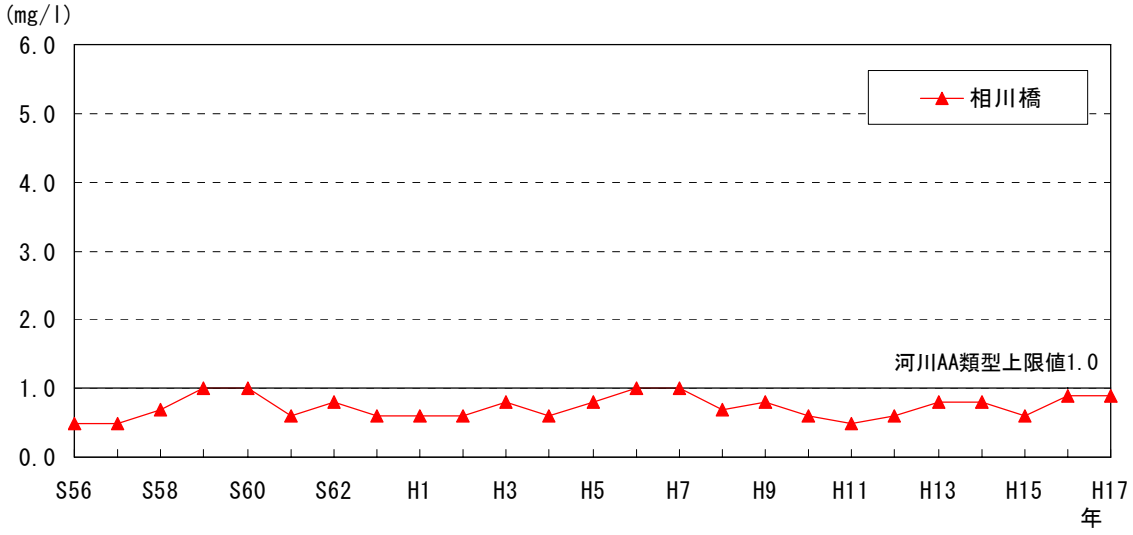


図 ６－２　尻別川水系における水質(BOD75%値)の経年変化(尻別川:AA 類型)

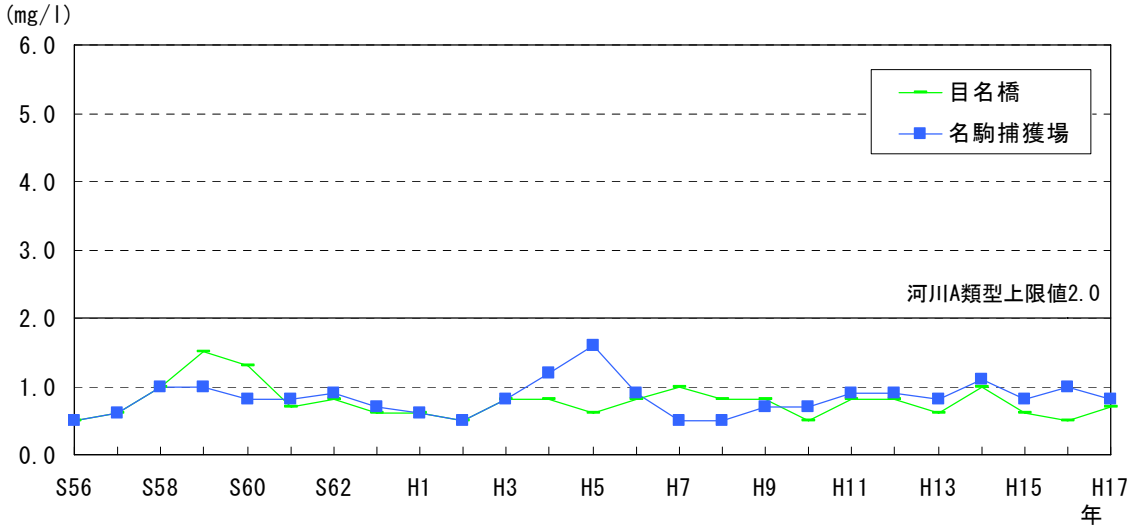


図 ６－３　尻別川水系における水質(BOD75%値)の経年変化(尻別川及び目名川:A 類型)

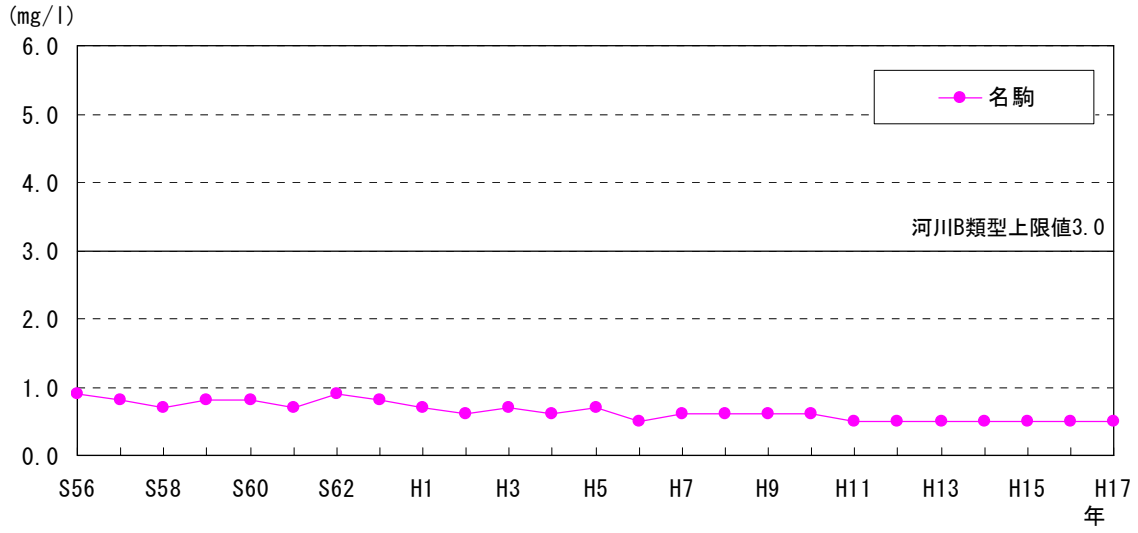


図　６－４　尻別川水系における水質(BOD75%値)の経年変化(尻別川:B 類型)

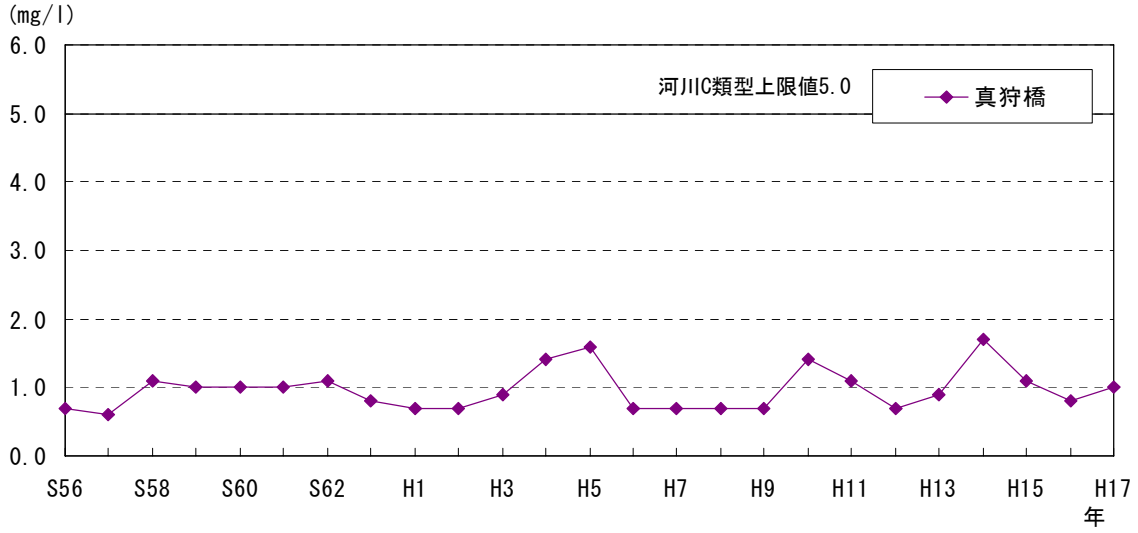


図　６－５　尻別川水系における水質(BOD75%値)の経年変化(真狩川:C 類型)

７. 河川区間の現状

７－１． 河川敷等の利用の現状

(1) 河川敷地の利用状況

尻別川水系は、別名蝦夷富士と呼ばれる羊蹄山とニセコ山系などの山間を流下するため、平野部は少ないが春の新緑、夏の清冽な流れ、秋の紅葉、冬の銀世界など四季折々の美しい景観をみせ、清冽な流れは釣りや水遊びの場として親しまれている。また、羊蹄山が支笏洞爺国立公園に、ニセコ連峰がニセコ積丹小樽海岸国定公園に夫々指定されとくに尻別川の流域内のどこからでも眺望できる羊蹄山が倒景として清らかな尻別川の水面に映える美しさは、流域住民にとってかけがえのない神聖な「ふるさとの山河」で、この山河との係わりの中で流域の歴史と文化が育まれてきた。

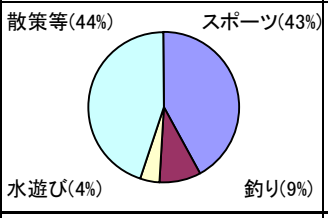
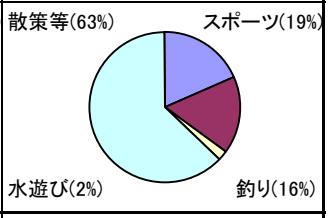
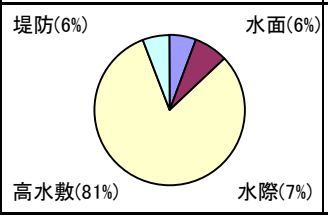
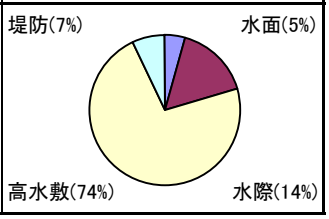
尻別川は渓流釣り、アユ釣りのメッカとして地元はもとより遠く管外からの釣り人が多く訪れ、また、カヌーによる川下りや激流区間でのラフティングなどの水面利用が盛んに行われている。

河川敷地の利用は、下流部では豊国（とよくに）橋上下流で河川環境整備事業による基盤整備と、蘭越町により尻別川河川公園パークゴルフ場、ランラン公園、山村広場の整備か行われ町民の健康増進と、世代間や他市町村民との交流が活発に行われ多くの人に利用されている。

また、目名川の合流する名駒では魚釣りを体験学習するフイッシュ・アンド・名駒や真冬でも雪の保湿効果を利用して植林を可能にした雪中植林を地元の方々と一緒に実施し官民協働で河畔林の再生を目指す。

中流域における河川空間の利用は、ニセコ町、倶知安町、真狩村の市街地周辺で補助の河川改修工事と町の公園整備により親水施設が整備され、地元出身の流行歌手の記念像が建てられている真狩村河川公園など堤内地の施設と一体として広域的な利用が図られている。

上流部の京極町では「ふきだし公園」と左岸の河川空間の総合的利用を計画し整備を進めている。また、喜茂別町市街地の右岸には利用可能な高水敷があり、河川空間利用の住民要望が多いことから喜茂別河川敷地公園が整備され、水辺の楽校として利用されている。

区分	項目	年間推計値（千人）		利用状況の割合	
		平成12年度	平成15年度	平成12年度	平成15年度
利用形態別	スポーツ	29	8		
	釣り	6	7		
	水遊び	3	1		
	散策等	31	27		
	合計	69	43		
利用場所別	水面	4	2		
	水際	5	7		
	高水敷	56	32		
	堤防	4	3		
	合計	69	43		

出典：河川水辺の国勢調査

(2) 高水敷の利用状況

尻別川の高水敷の占用状況は表7-1に示すとおり約60haの占用面積で、水田や採草地、その他として道路や道路橋等が多く、公園・緑地はランラン公園1ヶ所で約8haの面積を占用している。

割合で見るとその他が30%と最も多く、次いで26%の水田、22%の採草地の順となり、ランラン公園は14%を占めている。

表 7－1　河川敷地の占有状況

公園緑地		水田		畑		採草地	
件数	面積	件数	面積	件数	面積	件数	面積
1	8.05	53	15.17	30	4.10	12	12.87

建物		その他		合計	
件数	面積	件数	面積	件数	面積
25	0.16	131	17.17	252	57.50

資料:尻別川河川現況台帳図(許可占用物件)

尻別川河畔公園(ランラン公園・山村広場・リーバーサイドパークゴルフ場)

７－２．河川の利用状況

尻別川は、高水敷の幅が狭く空間利用可能な地区は豊国橋の上下流に限られているものの、自然のうるおいとやすらぎを得られる重要なオープンスペースとして、蘭越町付近の高水敷で河川公園（ランラン公園）が整備され、盛んに利用されている。

河川の利用については、ラフティングや釣りの他、稚魚の放流イベント等に広く利用されており、「尻別川せせらぎまつり」などの河川空間を利用したイベント等もおこなわれている。

図　７－１　河川の利用状況図

８. 河道の特性

尻別川の特性について日本全国の一級河川（全 109 河川）と比較してみると、①流域面積で 42 位の大きさである、②幹川流路延長で 33 位の長さである、③河床勾配は比較的急である、④流域の形状は細長い形状をしており、流域形状係数（流域面積/幹線流路延長 ^{2}）は 83 位である。また、尻別川の全流域に占める平地率は約 12%であり、山地流域として分類され、水資源は豊富で、流出率の変化は小さい河川である。

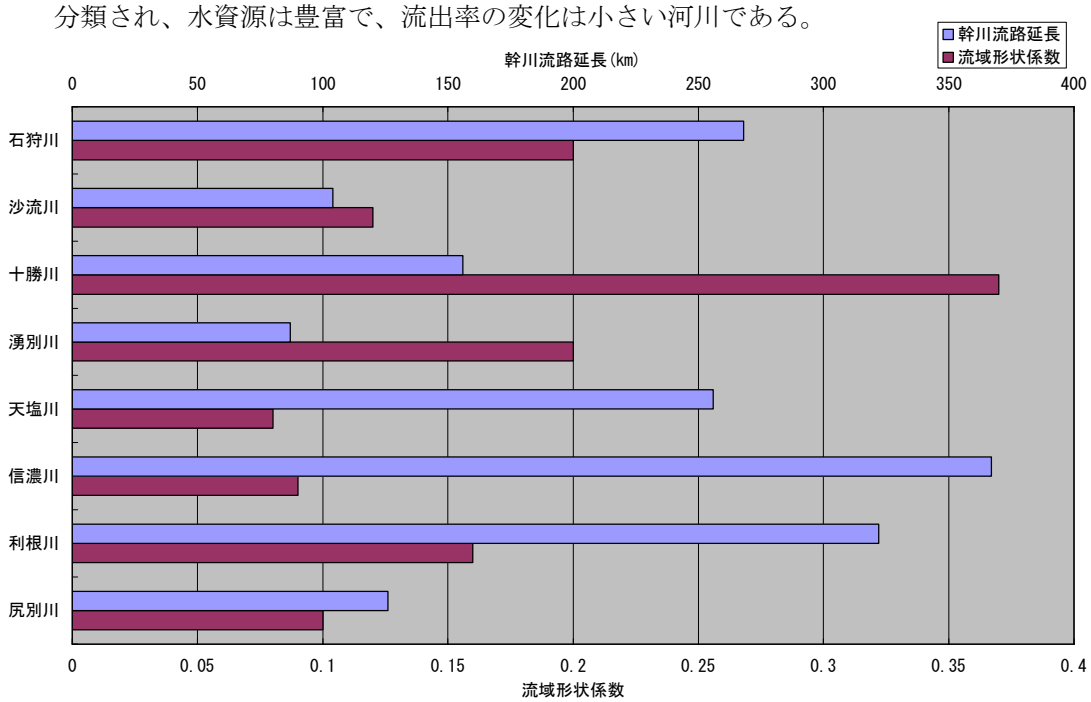


図　８－１　流域形状係数の比較

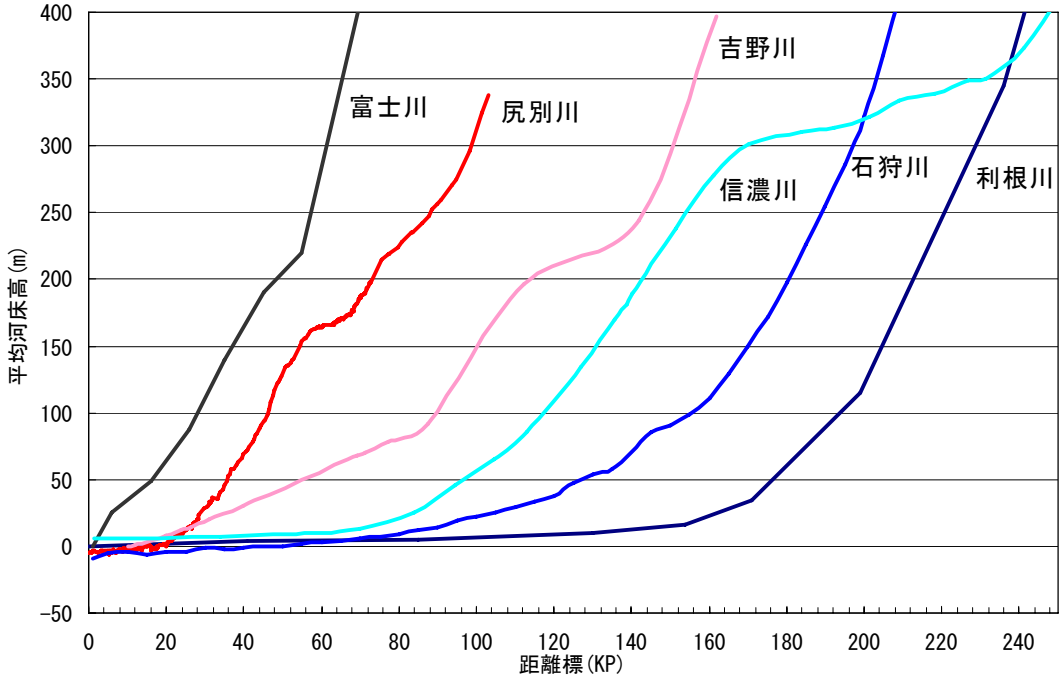


図　８－２　主要河川縦断図

８－１．尻別川の河道特性

尻別川は、その源を支笏湖流域との分水界をなすフレ岳(標高 1,046m)西方に発し、オロウエンシリベツ川、喜茂別川等の支川を合わせて、ニセコ町において真狩川、昆布川等の支川を合流した後、逆川、目名川などの支川を合わせて蘭越町磯谷で日本海に注ぐ、幹川流路延長 126km、流域面積 1,640km^2 の一級河川である。

１）上流域(源流部から喜茂別町付近)

河床勾配が約 1/20～1/60 程度の山間部急流区間であり、低水路は自然河川の様相を呈している。

２）中流域(喜茂別町付近から蘭越町付近)

河床勾配が 1/130～1/250 程度であり、市街地周辺を除き、河川は急勾配の狭窄部となっている。そのため、この地形を利用し 6 箇所の発電用取水堰が設けられている。

３）下流域(蘭越町付近から河口)

河床勾配が 1/500 から 1/5000 程度であり、アユやカワヤツメの産卵床が分布している。堤防は地形と河道の蛇行形状から山裾に取り付ける個所が多く、両岸とも不連続の堤防で高水敷の幅が狭く、空間利用可能な地区は豊国橋の上下流に限られている。

また、尻別川に生息するサケ・サクラマスの親魚の捕獲は、目名川の目名川橋下流地点で北海道さけ・ます増殖協会が「ウライ」を用いて行い蓄養、採卵受精後、独立行政法人さけ・ます資源管理センター北海道さけますふ化場蘭越事業所に収容し、ふ化した稚魚を給餌飼育後放流している。特にサクラマスについては種苗生産河川として日本海は勿論、全道でも主要な役割を荷ないその貢献度は高く評価されている。

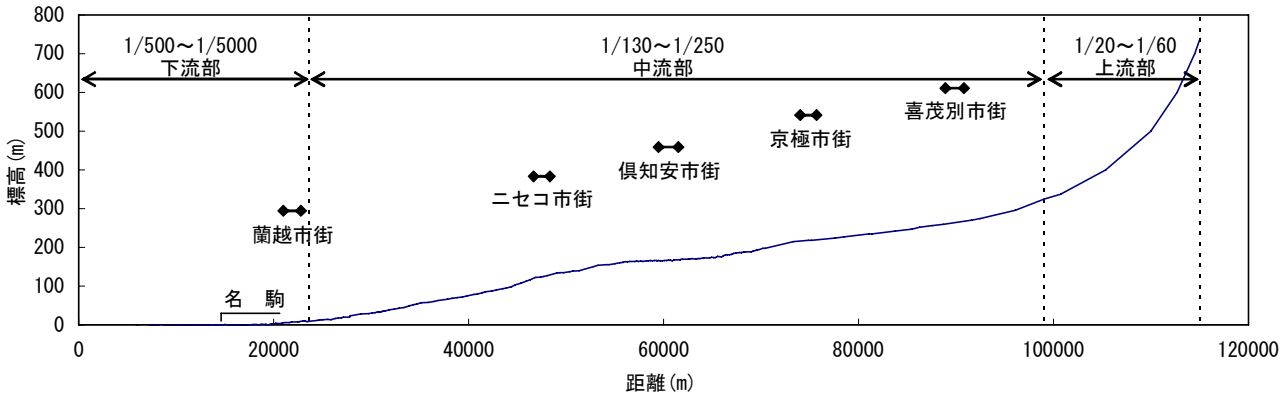


図　８－３　尻別川河床高縦断図

９.河川管理の現状

９－１．河川管理施設

直轄管理区間の堤防の整備状況は表 9-2 に示すとおり、平成 18 年現在で 96%が完成し、残り 4%が暫定区間となっている。また、直轄管理区間の水閘門等の河川管理施設の整備状況は表 9-2 に示すとおり、平成 18 年現在で樋門・樋管が 46 箇所、陸閘が 4 ヶ所となっている。

表 ９－１　直轄管理区間水閘門等河川管理施設整備状況

河川名	河川管理施設等	箇　所　数　等
尻別川	樋門・樋管	37 箇所
	水文観測所	水位観測所 6 箇所 (河口、名駒、蘭越、昆布、倶知安、喜茂別) 雨量観測所 8 箇所 (清原、喜茂別、倶知安、七線、真狩、ニセコ、新富、田下)
	陸閘	4 箇所
ペンケ目国内川	樋門・樋管	4 箇所
目名川	樋門・樋管	2 箇所
逆川	樋門・樋管	3 箇所
	床止	3 箇所

出展：尻別川治水 50 周年記念　大地を潤す尻別川
平成 18 年 北海道直轄河川樋門樋管水門排水機場実態表

(1) 堤防

表 ９－２　堤防整備状況

	延長(km)
完成断面	30.7(96.2%)
暫定断面	1.2(3.8%)
暫暫定断面	0.0
堤防不必要区間	13.5
計	31.9【45.4】

※延長は、直轄管理区間の左右岸の計である。【　】は堤防不必要区間を含む

(2) 洪水調節

・なし

(3) 排水機場等

・なし

※直轄管理区間の施設のみである。

９－２．水防体制

(1) 河川情報の概要

尻別川では流域内に雨量観測所(8 箇所)、水位観測所(6 箇所)を設置し、無線等により迅速に情報収集を行うとともに、これらのデータを用いて河川の水位予測等を行い水防活動に活用している。また、近年ではネットワーク網の整備により、リアルタイムの観測データや現地動画情報による管理、及び樋門ゲートの遠隔制御等、河川管理の整備を進めている。

(2) 水防警報の概要

尻別川では洪水による災害が起こる恐れがある場合に、初田橋・名駒・目名橋など 6 箇所箇所の水位観測所の水位データをもとに市町村を含む水防関係機関に対し、河川の巡視や災害発生防止のための水防活動が迅速かつ的確に行えるように水防警報を発令している。

(3) 洪水予報

尻別川では水防法および気象業務法に基づき、小樽開発建設部と札幌管区気象台が共同で発表している。流域の雨量や水位の状況、水位予測等を一般住民にわかりやすく迅速に伝えるべく整備を進めている。

図　９－１　洪水予測区間及び雨量・水位観測所

９－３．砂利採取

昭和 41 年に「河川砂利対策基本要綱」が策定されてからは、直轄管理区間において、砂利採取は禁止で土砂の採取については、河道計画・改修計画との調整の上で掘削残土等について、農業基盤整備等の公共事業に許可及び認可を行うものとしている。

９－４．危機管理への取り組み

(1) 水防連絡協議会との連携

洪水・高潮等による被害発生の防止または軽減を行うため、国及び地方自治体の関係機関が連携し、住民の避難、水防活動等を迅速かつ円滑に行うために水防連絡協議会が結成されている。この協議会により、重要水防箇所の合同巡視、水防団、水防資材の整備状況の把握、定期的な水防訓練等を行っている。

平成 18 年 蘭越町水防工法実技訓練

(2) 水質事故対策の実施

油類や有害物資が河川に流出する水質事故は、流域内に生息する魚類や生態系のみならず、水利用者にも多大な被害を与えている。水質事故が発生した場合、その被害を最小限にとどめるため、迅速で適切な対応が必要になっている。このため、環境保全連絡協議会により、連絡体制を強化するとともに、水質事故訓練等を行い迅速な対応を行うことが大切であり、また、水質事故に備え、常時から資機材の備蓄を行っている。

平成 18 年 水質事故訓練

(3) 洪水危機管理の取り組み

洪水危機管理において、平常時から危機管理に対する意識の形成を図るとともに、洪水発生時の被害を最小限に抑えるため、浸水想定区域図を公表するとともに水防計画・避難計画の策定の支援、土地利用計画との調整を関係機関や地域住民等と連携して推進している。

９－５．地域との連携

尻別川流域では、多くのＮＰＯや市民団体の活動が盛んに行われるようになってきており、地域との連携のもと、川づくりのあり方、親水施設の現地改善活動、川の清掃活動などのほか、環境教育の一環としての川づくりの自然観察会など、身近な自然を学ぶ活動も行われている。

今後は、尻別川統一条例の普及を図るとともに、地域のまちづくり事業と連携し、河川を地域レクリエーション、防災、まちづくりの拠点として位置づけ、地域と一体となった河川管理を行うことが必要とされている。地域住民と協力して河川環境を進めるためには、インターネット等のメディアを利用するなどして、地域住民に様々な河川情報を発信するとともに、地域からの河川整備に対する要望等を集約し、住民参加型の管理体制を構築する必要がある。また、河川清掃や、節水・水の再利用などを通じて、地域の人々の河川に対する愛護精神を啓発していくことも重要である。